

特集・足立明教授追悼

合い間の仕事としての手織り物生産

—ウズベキスタンにおける社会変容と女性—

宗野 ふもと*

Rug Production as “Minor Subsistence”: Social Transformation and Women in Post-independence Uzbekistan

SONO Fumoto*

The collapse of the Soviet Union in 1991 transformed the lives of the people of Uzbekistan. The last 20 years have witnessed the bankruptcy of collective farms, the degradation of the social security system, and a reassessment of traditional gender roles, the last of which dictated that men should be financial providers for their families and women should be mothers and homemakers. This thinking has re-emerged since Uzbekistan was freed from the Soviet ideology of gender equality.

Recent studies have described women as marginalized during post-Soviet Uzbekistan's social transition. Ideologically, women are expected to remain at home; however, most women have to work to support their family, e.g., as day laborers on private farms.

This paper focuses on rug production in northern Qashqadaryo Province to explore how women use this activity as a means of overcoming marginalization. Rug production is performed only by women, and it allows women to socialize and take a break from housework. It was found that women voluntarily lived according to the traditional gender roles but were occasionally able to depart from such roles.

1. はじめに

本稿は、ソ連解体以後のウズベキスタンにおける手織り物生産に着目する。そして生産の場における女性同士のやりとりを描くことで、先行研究においてソ連解体以後の市場経済への移行や伝統的男女観の再評価のもとで、周縁化されてきたとされる女性像とは異なる女性像を提示することを試みる。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2013年10月30日受付, 2013年12月20日受理

調査地域の女性は、家事や育児、私的な耕作地での農作業や家畜の世話、儀礼の準備などさまざまな仕事をしている。彼女たちの一日は、朝一番のお湯沸しからはじまり、日が暮れてその後の夕食の片付けまで続く。彼女たちの生活は、筆者の目からは実に忙しいものであると感じられた。それは、彼女たちの「私たちの仕事が多い (*ishmiz ko`p*)」や「私の時間が成立しない (*vaqtim bo`lmaydi*)」などの発言からも感じられることだった。ある日筆者は、滞在先の嫁サルタナトから「もし、家の仕事がなければ一日中手織り物を織っていられるのに」という言葉を聞いた。彼女の言葉から、筆者は、手織り物生産は家の敷地内で行なわれる仕事なのに、他の家の仕事とは異なるものとして捉えられているのではないかとすれば、それはなぜなのか、という疑問をもった。調査地では、手織り物生産は家畜飼育や農作業などとは異なり、現金収入源や食料確保に直結しないが、現在でも継続されている活動である。また、手織り物生産に携わるのは調査地域ではもっぱら女性である。完全な労働でもなく女性だけが行なう手織り物生産。この活動が具体的に誰によってどのように行なわれているのかを明らかにすることで、従来のウズベキスタンの女性研究とは異なる女性像を生活実践の文脈から描けるのではないかと考えたのである。

本稿の構成は次のとおりである。第2節では独立後ウズベキスタンの女性を対象にした先行研究の議論を紹介し、その問題点を明らかにして本稿の視座を提示する。第3節では調査地域の概要と女性の仕事一般を記す。第4節では調査地域における一般的な手織り物の生産過程を記述しながら、そこでどのような人々が関わっているのかを明らかにする。第5節では、筆者が滞在していたシャリフ一家で行なわれている手織り物生産について記述する。シャリフ一家では、敷地内に併設された工房で外国人観光客向けの手織り物が生産されている。工房における生産のあり様を織り手と雇い主であるサルタナトに着目して記述する。第6節では、前節までに導かれた女性の姿が、ウズベキスタンの女性研究でいかに位置づけられるのかを探る。

本稿に関する現地調査は、2010年5月から2011年11月に行なわれた。2010年5月から2011年4月の現地調査はチロクチ地区アラブバンディ村Q集落のフドイクロフ・シャリフ氏宅に滞在しながら行なわれた。データは、滞在中に行なった143世帯の世帯調査と、手織り物工房や手織り物生産を行なっていた8世帯での聞き取りと参与観察からなる。

2. 先行研究と本稿の視座

ソ連解体後のウズベキスタンの社会経済状況を踏まえて、まず、ソ連解体後のウズベキスタンの女性がどのような先行研究においていかに描かれてきたのかを記述する。そして、論点の整理と問題点を明らかにしたい。

ソ連解体以降、ウズベキスタンにおける市場経済への移行は、人々の生活に大きな影響を与えてきた。移行経済が人々の生活にもたらす変容は先行研究によって報告されている

[Koroteyava and Makarova 1998; Kandiyoti 1998; 樋渡 2008 など]. 村落部の人々にとっては、国営農場（ソフホーズ）の民営化による失業問題や、社会保障の低下、継続するインフレなどとして経験されている。その一方で、ソ連時代に比べて経済活動が自由に行なわれるようになり、経済的な成功を収めている人々も存在する。市場経済の浸透は、ウズベキスタンにおいて生活程度の格差をもたらしていると考えられる。

また、「ウズベク民族」を主体にしたナショナリズムの高揚も、独立後の大きな社会変化である。ナショナリズムの高揚は、「新しい独立国はそれぞれ『民族』意識と『国民』意識をより密着させる、あるいは『民族』意識を『国民』意識へと収斂させるという課題に、より現実的・具体的に取り組まねばならなくなった」[帯谷 2003: 35] というソ連解体以後、旧ソ連諸国が共通に抱えた課題を背景としている。ウズベク民族の伝統文化が、ウズベキスタンの新しい国づくりのために不可欠な装置として位置づけられた。伝統的な男女のあり方もウズベク民族の文化のひとつであり、男性は稼ぎ頭となり、女性は家で家事育児に専念するという家庭における性別役割は、メディアなどを通じて宣伝されている [Tokhtakhodzhaeva 1999].

2.1 「女性問題」

ソ連時代、女性を対象とした研究は「女性問題 (*zhenskii vopros*)」というカテゴリの中で取り上げられ論じられてきた。ウズベキスタンの歴史学者アリモヴァは、ソ連が解体した1991年に出版した自著『中央アジアにおける女性問題 (*Zhenskii Vopros v Srednei Azii*)』の中で次のように述べる。ソ連時代に女性は生産現場で働くようになったが、女性にとってより重要なのは家族における役割であったため、結局のところ女性解放運動も根本的な男女不平等の解決にはいたらなかった。また、ソ連末期に行なわれたペレストロイカが社会保障の低下など社会問題を引き起こしたことと女性の地位との関連もまた、「女性問題」で扱うべき新たな問題となった [Alimova 1991: 5-8].¹⁾ この記述の背景には、ソ連時代に宣伝された社会主義達成のために女性の社会進出を促すべきというイデオロギーがあった。ウズベキスタンの文脈では、社会主義の達成を阻む社会システムとして家父長制が指摘されていた。そのもとで最も抑圧された存在である女性の解放こそが、社会主義実現の第一歩であるとされていた。こうした問題意識のもと、ウズベキスタンの女性の不平等性と、社会・文化的な女性の地位の探求が「女性問題」のカテゴリの中で行なわれてきた [Kamp 2009].

2.2 ウズベキスタン女性研究

独立後ウズベキスタンの女性を対象にした研究も、「女性問題」の問題意識を継承し女性とその不平等性に主に焦点が当てられてきた [Kamp 2009: 7]. 「女性問題」と異なる点は、ソ連解体以降の女性を対象としている点と、ソ連時代の女性をめぐる近代化政策を批判的に考察

1) 「女性問題」に関するソ連時代の研究成果は、アリモヴァの著作以外にも多数あるが、本稿では十分に取り組むことができなかった。この点に関しては、今後の課題としたい。

している点である。論点は、女性の周縁化と主体性の2点に大きく分けられる。

2.2.1 「理想」と「現実」の板挟みとなる女性—周縁化される女性

市場経済の浸透は、女性の間でも社会的、経済的格差を生み出しつつある。女性の周縁化については、とりわけ、ウズベキスタンにおける市場経済の浸透と伝統的男女観の再評価を背景にして、女性の労働や社会的地位が取り上げられてきた [Akiner 1997; Kamp 2005; Kandiyoti 2003 など]。

社会経済状況に強く規定されながら、女性の生き方は2つのパターンで描かれる。第一は、経済活動の自由化の中でチャンスをつかみ、国内外で成功した女性たちで、第二はこうした成功した女性からこぼれ落ちるその他大勢の女性たちである。

チャンスをつかみ、成功した女性たちは、ビジネスで成功したり、学歴を生かし旧ソ連圏以外の海外で仕事をする機会を得たりする女性たちである [Akiner 1997; Megoran 1999; Kamp 2005]。成功した女性たちの多くに共通しているのは、高学歴²⁾で、ソ連時代の仕事で培った人脈、経験をもっていることである。しかし、こうした女性たちもまた、離婚や不妊など結婚や家庭生活の問題を抱えている。家の外が活動の主たる場である彼女たちは、「女性は家にいて、家事、育児に携わるべき」という規範に沿って生きることが困難で、彼女たちはジレンマを抱えているというものだ。

一方、成功した女性からこぼれ落ちるその他大勢の女性たちは、市場経済への移行や伝統的男女観の再評価の中で、「苦境」にあるという認識のもとに記述されてきた [Olcott 1991; Tokhtakhodzhaeva 2008 など]。たとえば、家長を頂点とした家族内のヒエラルキーにおける女性の地位に関して、フェミニストの立場を取り言論を発信するNGO活動家のトフタホジャエヴァは、アジモヴァ [Azimova 2001] の著作を引用しながら、女性はウズベク人の家族の中で、家長である年長男性の影響のもとにあり、さらに、娘のころから将来の夫すなわち家長を幸せにするために教育されていることを記している。「あんたには嫁の貰い手がない」は娘に対するお説教の常套句であるという。嫁は家族のために一日中仕事に追われており、そこに自分の意思は反映させることはできず、結果として自らの健康にさえ気を配れないことへの関連とともに論じられている [Tokhtakhodzhaeva 2008: 177-179]。

こうした「苦境」は労働の現場でもあらわれている。カンディヨティ [Kandiyoti 2003] は、集団農場の解散に伴う生産組織の民営化プロセスの中で、女性の不安定な労働環境を描いた。ウズベキスタン独立後、国営農場の運営破綻によって多くの女性たちは職を失った。それにかわる仕事として、女性たちは民営農場での作業に携わることとなった。³⁾たとえば、アンディ

2) 元来は花嫁の持参財で売り物として位置づけられていなかったカシュタ（刺繍）の、ソ連解体以後の外国人を購買層にした商品化について今堀 [2006] は明らかにしている。その中で彼女は、カシュタ業を営む女性10名中7名が大学教育、2名が高等教育機関卒業生であり、大半が高学歴である、と述べている [今堀 2006: 123]。

ジャンの民営農場では、50代の女性が娘と義理の娘とともに農業を行なっている。男手はかりずに作業をしているという。民営農場の労働ではソ連時代のような社会保障は期待できず、労働環境は不安定なものである。苦行のような農作業に従事せざるを得ない女性たちがいる一方で、農場経営に携わっているのは男性が主であり、労働市場においても伝統的な男女観が影響をもたらしていることをカンディヨティは指摘する [Kandiyoti 2003: 236]。

さらに、現金の重要性が高まる中、女性は、生計維持のために農業以外にも複数の副業を掛け持ちしなければならない。人々が生計維持のために複数の収入源を確保していることは、先行研究によって明らかにされているが、女性のする副業は彼女たちが周縁化されていることを物語っているとカンディヨティは述べる。女性に適した副業として仕立てがあるが、この技能は多くの女性が有しているので副業としては役立ちにくい。儲けの大きい活動は国境を越える米取引などの商売だが、これは比較的自由に行動ができる未亡人や年配の女性に限られており、すべての女性が参入できる経済活動ではない。結果として、女性の生計維持活動は退縮的で長期的には良い展望は望めないとカンディヨティは述べる [Kandiyoti 2003: 247]。彼女の分析では、ソ連解体以降ウズベキスタンでは伝統的な男女観の再評価が起きているが、その理念どおりに生活することは経済的に難しく、家にいるべき女性も家計に貢献することが求められている。しかし女性の生計維持活動は、伝統的な男女観の枠組みの中で行なわれている。理念的に家にいるのが望ましいとされる女性に適した仕事は限られており、労働環境も不安定であり、結果として女性は経済苦と伝統的な男女観のしがらみの中で生計を支えなければならない状況にあるというのだ。

これらの議論は次のようにまとめられるだろう。女性の間での格差は顕在化したがるが、根本的な問題は通底している。市場経済の浸透は、女性の労働市場への進出をソ連時代とは異なる形で促すものだった。ナショナリズムと関る家庭における女性の役割を再評価する動きは、労働市場においても浸透していて、家庭と仕事の両立の困難さや労働条件の悪さに反映されている。これらの先行研究では、女性を周縁化させる社会構造の解明が焦点となっており、女性自身がこうした状況をいかに捉えているのかという当事者の視点に立った議論は不十分であった。

2.2.2 伝統の保持者としての女性—イスラーム復興と女性

女性の周縁化を取り上げた研究がある一方で、女性の主体性に着目した研究もある。ペレストロイカを契機に生じたイスラーム復興を背景として、イスラーム実践や慣習儀礼における女性の活動を取り上げ、日常生活における女性の主体性とイスラーム復興を結んで論じた研究がある [Kandiyoti and Azimova 2004; Fathi 2006 など]。これらの研究では、ソ連時代、モスク

3) 独立後、農村部では女性が職を得るのは非常に難しく、農業が女性にとっての唯一の現金収入を得る手段になっているとカンディヨティは述べている。さらに、農作業は種をまく、ひたすら収穫をする、といった単純作業のため、女性の技術向上には結びつかないことを仕事の無いことと併せて、問題視している [Kandiyoti 2003]。

や神学校などの公的領域におけるイスラームが、弾圧、取締りの対象となったのに対し、家を中心とする私的領域がイスラームをはじめとするウズベク民族の「正統」な文化の保管場所であったことを指摘する。私的領域におけるイスラーム実践はオティン (*Otin*) やバフシ (*Bakhsi*) などの女性イスラーム知識人を中心に継続されていて、独立後のイスラーム復興の原動力のひとつとして位置づけられている。

女性の主体性に着目した先行研究の中でも、ペシュコヴァは人類学的調査を行ない女性たちの生活実践や声をすくい上げる。彼女はフェルガナ盆地の女性イスラーム知識人の活動を取り上げ、彼女の活動が公的領域と私的領域を越境したものであることを描き、イスラームのような伝統的な実践が、従来用いられてきた公＝男性／私＝女性の枠組みでは捉えられないことを提示した [Peshkova 2009]。たしかにペシュコヴァは、女性の主体的側面を描いているが、その際に対象とされてきたのは、社会で影響力をもつ一部の限られた女性であったといえる。すでに述べたように、その他大勢の女性の実際の生活がどのようなもので、女性がその状況をどのように捉えているかは彼女の研究対象とはならなかった。

2.3 人類学的研究

人類学的研究では、女性研究における「周縁化された女性」像を女性の生活実践や語りをすくい上げることで再考するという試みが、菊田 [2003] や和崎 [2007] らによって行なわれている。菊田は、人々は、男性が一家の稼ぎ頭で、女性は家にいることが望ましいとされているイスラームと関りのある伝統的男女観を参照しつつも、現実には、生計維持のために女性も経済活動を行なっていることを聞き取り調査から明らかにしている。そして、こうした活動を、公＝男性／私＝女性の領域の越境と捉える。和崎は、女性を対象とした先行研究では、結婚や出産などの女性の社会的な「立場」の変化が考慮されていない点を指摘する。そして、女性物乞いのライフヒストリーから、結婚や出産という女性の立場が変化する際にとりわけ顕在化する、女性に関する性規範を明らかにする。そしてその規範に沿えなかった、あるいは意識的に沿わなかった彼女たちの受動的であり能動的な生のあり方を描いた。

彼らは、ジェンダーや女性を切り口として、ソ連解体以後の人々の生活、とりわけ女性の生活が、伝統的な男女観の再評価や市場経済への移行との関連だけでは描くことができない点を示した。そして、女性研究者たちによって「構造の犠牲者」と捉えられてきた「その他大勢」の女性の、ときに受動的、ときに能動的な生き方を明らかにしている点で、従来の女性研究とは一線を画すものであるといえる。

2.4 本稿の視座

本稿では、ソ連解体以後のウズベキスタンの社会経済状況が女性を周縁化させる側面をもっていることにも留意しつつ、女性たちの行動や語りに着目し、生活上生じる問題に自ら対処する女性と、それを可能にしている調査地域の生業、経済活動、社会規範との関りを明らかにす

る。本稿では牧畜を主たる生業とする調査地域で盛んに行なわれている手織り物生産というひとつの活動に着目する。後述していくが、手織り物生産の現場は世帯外の女性が集う場所で、彼女たちのおしゃべりで賑わい、関係が構築されていく場であった。こうした活動に着目することで、女性の生活をより重層的に記述できると考えられる。たしかに、トフタホジャエヴァがいうようにウズベキスタンの未来のためには、女性の置かれている現状を批判的な眼差しで冷静に調査していくべきなのかもしれない [Tokhtakhodzhaeva 2008: 240]。彼女の言葉は、未婚女性として現地調査中に村で生活することへの窮屈感と疑問、焦りを感じた筆者にとって納得のいく言葉でもあった。しかし、日本で生活してきた筆者とはおそらく異なる価値規範の中で生きている調査地の女性を、筆者は現地調査を終えてもなお、ソ連解体以後のウズベキスタンの社会経済の「犠牲者」として描くことには躊躇いを感じた。たしかに、女性は周縁化されているのではないかと思われる場面、たとえば外出がままならないことや結婚への圧力など、には数多く遭遇した。そして、おそらく彼女たちもこうした点に対して何らかの不满（意識的であれ無意識的であれ）を感じながら日々を生きている。ところが、彼女たちの日常生活は、苦勞もあるが、おしゃべりや結婚式への参加の楽しみも含み成り立っている。ソ連解体以後の社会経済状況が、女性を周縁化させている側面があることは把握しながらも、明らかにすべきは、調査地の女性が性規範やその他の慣習、生活の中でどのように問題に対処し生きているのかという点だと筆者は考える。カンディヨティやトフタホジャエヴァのように、ウズベキスタンの女性を取り巻く問題を浮き彫りにすることで、彼女たちにとってのあるべき姿を示すことは筆者にはできない。しかし、彼女たちがどのような環境のもとに生活し、何を重要なものとして捉えているのかを描くことで、女性は犠牲者か否かの議論を越えた、異なる展望がみえてくるのではないか。⁴⁾

3. 調査地域における手織り物生産

3.1 調査地域の概要

ウズベキスタンを含む中央アジア地域研究において、カザフスタン、クルグズスタン、トルクメニスタンは牧畜を主たる生業とし、ウズベキスタン、タジキスタンはオアシス農耕を主たる生業とする人々が居住する地域であると捉えられてきた。本稿の調査地であるカシュカダリヤ州は、ウズベキスタンの中では牧畜が盛んな地域であり、先行研究ではあまり扱われてこなかった地域である。

4) 女性が犠牲者か否かの議論を乗り越える視点を提示するものとして、ベシコヴァ [Peshkova 2013] の著作が挙げられる。彼女は、伝統的な男女観を支持し、女性は家内労働と子育てに専念できる社会の実現を願うウズベク人女性の活動家のライフヒストリーと思想を記述、分析している。そこから、ポスト・ソヴィエト時代における、性別役割、女性の権利、イスラームに関する言説理解を、ウズベキスタンという社会、歴史的特徴を踏まえながら明らかにしている。

カシュカダリヤ州はウズベキスタンの南東部に位置し、チロクチ地区はカシュカダリヤ州の北部に位置する（図1参照）。『ウズベキスタン民族百科事典（Oʻzbekiston Milliy Entsklopediyasi）』によれば、面積は2,835 km²、その地形は南西から北東へ、平坦な乾燥ステップ（標高400～600 m）、丘陵地帯（700～900 m）、山岳地帯（1,200～1,500 m）へと徐々に変化する[Azizxoʻjaev va Boshqalarga xokazo 2005: 623]。筆者の調査地は地区の中部から北部、乾燥ステップから丘陵地帯の境界に当たる。気候は大陸性気候で、年間降水量は地区の中心地チロクチ市では368 mmとあるが、調査地周辺ではより少ないと思われる。この降水量の少なさから、穀類と綿花栽培、家畜飼育が主な生業である。

Q集落は、なだらかな丘が連なり、遠く北東にザラフシャン山脈を望むのどかな場所にある。人々は、教師や郵便局員などの公務員、その他タクシー運転手などさまざまな職を掛け持ち現金収入を得、それと合わせて自留地での小規模な農業や家畜売買をして生計を立てている。年金や育児手当など各種公的扶助も重要な現金収入源である。150,000～200,000スム（約70ドル～93ドル）がQ集落における1世帯の平均的な1ヵ月当たりの現金収入だといわれていた。⁵⁾ 1974年に集落から北5 km程のところに開通した灌漑水路の灌漑用水を利用して、Q集落では自留地での主に自給用の青果物栽培が可能になった。それ以前は、牧畜と天水農業が主な生業であった。ところが、近年は水路の老朽化が激しく、自留地によっては水が

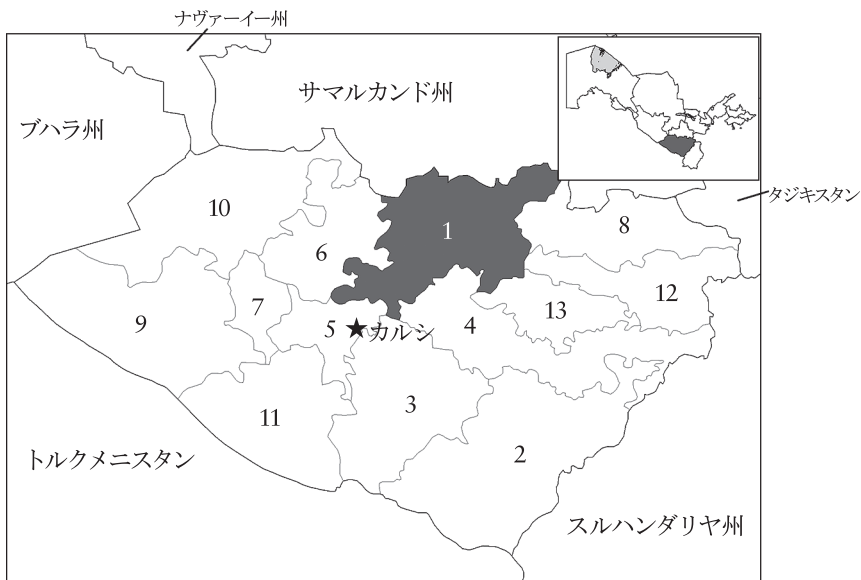


図1 カシュカダリヤ州行政区画地図

1：チロクチ地区、2：デフコナバッド地区、3：グザル地区、4：カマシ地区、5：カルシ地区、6：コソン地区、7：カスピ地区、8：キタブ地区、9：ミニシュコル地区、10：ムバラク地区、11：ニシオン地区、12：シャフリサブス地区、13：ヤッカボグ地区

十分に届かないこともあり、思うように作物栽培ができない状況にある。自給できない分の食料はバザールで買い求める必要がある。こうした事情から、Q集落では家畜の飼育に力を入れ、現金収入源としている世帯が多い。

3.2 調査地域の女性

2010年6月から10月にかけてQ集落で行なった143世帯の世帯調査⁶⁾の情報から、義務教育ではない中等教育通常開始年齢の16歳以上で、且つ学生ではない女性のデータを抽出して、数字からQ集落の女性を描く。抽出されたのは248名で、1924年から1994年生まれまでの女性が含まれる。学歴⁷⁾に関しては、高等教育を受けたのは248名中1名(0.4%)、中等専門教育が32名(12.9%)、義務教育が206名(83.1%)、義務教育以下が7名(2.8%)であった。⁸⁾この数字から、一般的なQ集落の女性の学歴は義務教育修了程度といえる。職業に関してはどうか。248名中84名(33.9%)が何かしらの収入源をもちそれを自らの職業とみなしている。⁹⁾このうち32名(12.9%)がマクタブ教師、清掃人、医療関係者、職人など、年金などの社会保障手当の付く職に就いている。一方で、約半数の117名(47.2%)が「*uy bekasi*;家の仕事を中心になってする人、以下家内労働者と記す」であると答えている。なお、残りの23名(9.3%)は年金受給者であった。家内労働者は、マクタブ教師や医療関係者など公職や、手織り物生産や仕立てなどの副業をもたず家の仕事を主にしている女性である。ただし、調査地における主な世帯収入源は家畜であり、家畜の世話には家内労働者である女性も携わる。つまり、彼女たちの仕事はもっぱら家事育児といった再生産労働だけではないということだ。また、職業として最も多かったマクタブ教師といえども、実際は週に数コマの授業のみを受け持つことが多く、フルタイム労働に就いているとは言い難い。彼女たちは家の仕事を主にしながら、数コマのマクタブの授業を受け持つというのが実際である。

180名の既婚者のデータをもとに結婚に関する概要を明らかにする。平均年齢は40歳である。結婚年齢は平均18歳であった。¹⁰⁾出身地に関して、約半数弱の86名がQ集落出身、94名がその他の集落の出身であった。半数強の女性は集落外から嫁いできており、村内での通婚

5) ただし、調査地域では月給を受け取るのは143世帯中42世帯であり、月単位で家計がやりくりされているとは言い難い。上の数字はあくまでも目安である。

6) 世帯構成員、自留地の面積、家畜保有数、手織り物の生産状況などに関する質問表を作成したうえで、筆者が世帯主もしくはその妻に質問し書き込んでいくという方法で行なった。なお、Q集落には150から160世帯があることが確認されている。集落の外れにある世帯に関しては、訪問に関して協力者がいなかったことから未調査となった。

7) ウズベキスタンの教育制度は次のとおり。義務教育は9年である。9年及び11年制の初等・中等教育機関マクタブ (*maktab*)、2年及び3年制の後期中等教育機関の職業カレッジ (*koreji*) 及びアカデミックリツェ (*litsey*) からなる。その上に高等教育と続く。

8) 不明2名。

9) 職業の内訳は、マクタブ教師が23名、手織り物の織り手が12名、衣服の仕立てが14名、医療関係が4名、マクタブ掃除人3名、農業関係1名、地区役所1名、畜産関係1名、各種ビジネス4名である(複数回答)。

10) 結婚年齢を確認できたのは147人(180人中)。

を主とする定住系ウズベク人の婚姻形態とは異なる様子がうかがわれるが、¹¹⁾ そこには緩やかな通婚圏が存在していると考えられる。

これらのデータから Q 集落の一般的な女性のライフコースは次のように描ける。マクタブ高学年から修了後 2、3 年のうちに結婚話が浮上し具体化する。婚姻による居住は夫方を基本とするため、女性は結婚を機に実家を離れることとなる。筆者の知る限りでは、隣近所へ嫁ぐことも多くみられたが、データからもわかるように半数以上の女性が集落外から嫁入りをしており、結婚を機に生活環境が変化する。「結婚は遅かれ早かれ皆するもの」と認識され、実際にはほとんどの女性が一度は結婚をするが、未婚の娘たちにとって結婚は不安と期待が入り交じった複雑なものとして捉えられている。結婚後は婚家では嫁として家の仕事を遂行することが求められる。調査地域で嫁を迎え入れる理由として、姑が家の仕事をするのが体力的に難しくなったことがしばしば挙げられていた。もちろん結婚の理由はそれだけではないことには留意すべきである。しかし、嫁は婚家の労働力として迎え入れられている側面があることがうかがえる。

3.3 日々の仕事と手織り物生産

調査地では、女性たちの仕事は一年を通して行なわれる家事・育児、家畜の世話などの家内労働と、季節労働からなっている。家内労働は家の仕事 (*ro`zg`or ish*) と呼ばれる。サルタナトが「私たちの仕事は家の仕事 (*Biznining ishmiz ro`zg`or ishi*)」と自らの役目を規定するように、女性の役割は第一に家の仕事の遂行である。基本的に活動する時間は日の出から日の入り後の夕食の片付けまでなので、¹²⁾ 季節によって活動時間も異なる。季節に関りなく女性が行なう家の仕事とは、かまどの火起こし、パン焼き、朝昼晩の食事の準備と片付け、搾乳、庭の掃き掃除、部屋の片付け、洗濯、針仕事、育児である。

図 2 は筆者の観察と聞き取りに基づいて作成した季節労働の内容である。この図から、季節によって労働内容が異なることがわかる。農耕と牧畜に関する仕事が季節労働の柱となる。シャリフ一家では、女性が農作業をすることはほとんどなかったが、他の世帯では人手が足りなければ耕作地で土ならしや収穫作業をする女性もいる。家畜の世話は通年行なわれ、エサやり、小屋の掃除、出産介助や放牧、毛刈りの作業、家畜飼育に関する仕事には男女問わず携わる。この他、9 月下旬から 11 月初旬にかけては民営農場での綿花の摘み取り作業が行なわれる。収穫した量によって賃金がもらえるので、現金収入の少ない世帯では、綿花の摘み取り作業は数少ない現金獲得の機会である。儀礼に関しては、イスラーム暦に合わせて行なわれ、断食月

11) たとえば、ナマンガン州ボブ地区の定住民が多数を占める村落で調査を行なった和崎は、村内結婚が 83.7%と、村内結婚が選好されていることを示している [和崎 2012: 29]。

12) 夕食のあとは、すぐに就寝することもあれば、子どもたちの勉強をみたり針仕事をしたりなど、活動することもある。乳飲み子がいれば、夜間の育児も母親の役目となる。

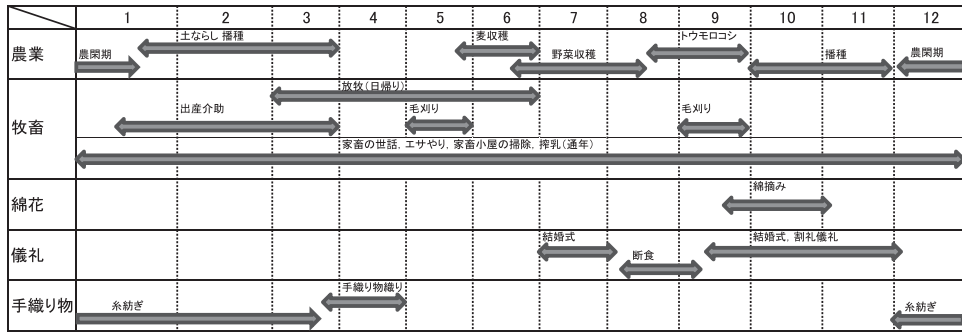


図 2 調査地域の労働サイクル

には結婚式は行なわれない。ただし、多くの客をもてなさなければならない結婚式や割礼儀礼は、食料の安い夏から秋にかけて行なわれることが多い。2010年の暦では8月11日から9月9日が断食月となったために、その前後に結婚式が集中することになった。

手織り物生産はイラン太陽暦の元日に当たるナウルズ(3月20日前後)後から4月にかけて行なわれる。この時期に手織り物が生産される理由として考えられるのは、ナウルズ後から3月いっぱいマクタブが休暇に入るのを娘を織りの作業にかり出せることと、他の労働との関りでみれば、夏から秋にかけては自留地での農作業や儀礼の手伝い(もしくは主催)、民営農場での綿花収穫の各種労働が続き、継続して織りの作業ができない事情があることだ。手織り物生産は日々の家の仕事や季節労働に優先されて行なわれることはあまりない。また、冬になると、屋外での作業が難しくなるし、糸が硬くなり非常に織りにくくなるので生産は避けられる。冬の間、女性たちは春の生産に備えて糸を紡ぐ。手織り物は一旦整経をして織りはじめると、できるだけ早く織り上げるのが望ましいとされているので、織り手はできれば一気に織り上げてしまいたいと考えている。3月後半から4月にかけての気候の良さは、屋外での織りの作業に適している。労働力の確保と気候の良さが、Q集落で春に多くの世帯で手織り物生産が行なわれる理由になっていると考えられる。

4. 無償労働としての手織り物生産

4.1 羊毛の加工と糸紡ぎ

主な材料となる羊毛は、調査地では人々は週に1度開催されるバザールの一面にある羊毛バザールで購入したり、自家用の羊毛でまかなったりしていた。¹³⁾ 調査地周辺では水環境の悪さから、綿花栽培にはあまり適していないため、経糸に多く用いられる綿糸はバザールで購

13) 1頭の羊から1度の毛刈りで取れる量は約500gとのことであった。調査地周辺で主に飼育されていたのは、ヒッサール種(現地ではジャイダルと呼ばれていた)で、肉用種である。肉用種飼育の背景には都市部における食肉需要の高まりがあると考えられる。肉用には優れているが羊毛採取には適していない種とされている。

入されていた。5月と9月に羊または山羊の毛刈りが行なわれる。刈られた毛には油やほこりなどの不純物が多く付いているので放っておくと虫に食われる。そのため、できるだけ早く手織り物などに利用する必要があるのだという。刈られたままの毛は絡まっていて紡ぎにくい。そのため、紡ぎ作業の前に原毛は工場に運ばれ、カーディング機でほぐされて均一な密度に加工される。2011年10月には、原毛1kgにつき500スムの料金でカーディングがされていた。

糸紡ぎは冬の間にに行なわれることが多い。¹⁴⁾ 人々の説明によれば、冬は自留地での仕事もなくなり暇になるので、女性は皆糸を紡ぐのだという。紡ぎ方は次のとおりであった。羊毛のかたまりから直径3cm程の羊毛を筒状にして取り出し、左手首あたりに巻きつける。右手にもった糸紡ぎ棒を太ももに当てて反時計回りに回転させながら羊毛を撚る。糸はそのまま紡ぎ棒に巻きつけられていく。適当な大きさになると紡ぎ棒から取り外される。この毛糸を用いて手織り物を織ることは可能となるが、普通はもう1本の糸とともに撚り合わされ双糸にされる。単糸は双糸に比べて弱いので、単糸を使用した手織り物の質は双糸を使用したものに比べて劣る。つまり、1本の糸は、3回の撚り作業から成っている。

滞在先の10歳になる娘が糸を紡いでいた。聞けば、生まれてはじめて糸を紡いだのだという。筆者もまた糸紡ぎ初心者だったが、母親と一緒に座って苦もなく糸を紡ぐ彼女のように、どうがんばってもなれないのであった。「フモトを見ているとやっぱり見るのも（糸紡ぎの）練習なんだわ、と思うわ。ほら、ディノラ（娘）ははじめての糸紡ぎ。でもなんの苦勞もせずに紡いでいるでしょう」と母親のサルタナトは不思議そうに言っていた。滞在先の手織り物工房で働いていた織り手たちも、誰に教えてもらったのでもなく、均一で細い糸を紡いでいく。Q集落から50kmほど離れた村に嫁いだサルタナトの叔母は「荒野の娘にしてみたら糸紡ぎは遊び。でも村の女性は誰ひとりとして知らない。手織り物の織り方も¹⁵⁾」と語っていた。こうした発言から、調査地周辺の女性ならば、誰に教えてもらわずとも、糸紡ぎは簡単にできる仕事だと考えられているようだ。以下は、シャリフ氏宅に併設された手織り物工房に長男の嫁のアダシと四女のマロハットが糸紡ぎをしながらやってきた時の様子である。¹⁶⁾

事例1：糸紡ぎと外出

1月の終わりころ、シャリフ氏の長男の嫁アダシと四女マロハット¹⁷⁾が糸紡ぎをしながらやってきた。工房に入ると、おもむろに織り手の娘たちに自分たちが糸紡ぎをする場所を確

14) 筆者の滞在先では外国人観光客向けの手織り物が生産されていたため、例外的に手織り物生産と糸紡ぎは通年行なわれていた。

15) ここでは、荒野 (*dashut*) は調査地周辺のことで、牧畜を主な生業とする人々の居住地である。村 (*qishloq*) は、農耕を主な生業とする人々の居住地のことを指している。

16) 糸紡ぎは歩きながらでもできる仕事である。

17) アダシとマロハットの家は隣接している。なお、2人の家からシャリフ氏宅へは徒歩で15分ほどである。

保するように、と言いつけた。アダシは作業をする織り手たちに盛んに話しかける。が、彼女たちは突然の年上の女性の訪問にぎくしゃくとした対応をしていた。それを察したのかアダシは「娘たちの邪魔をしているみたい、私たち」と何度も大きな声で言い、マロハットと筆者に向かいの丘に住んでいるアノラのところで糸紡ぎをしようと言いだした。マロハットと筆者、それになぜかチンニ¹⁸⁾も行くと言い出したので、4人連れ立ってアノラの家に向かった。ところが、タイミングが悪く、アノラは留守だった。アダシは「私たちは、どこへ行きましょうか」と困り気味に言い、「アザム¹⁹⁾ おじいさんのところに行きましょうかね」と新たな漂流先を提案する。しかし、アノラの嫁、オイサートが「座ってください、座ってください。そのうち義母は帰ってきますから」と引き止めたために、アダシ一行は家に上がることになった。パンとお菓子、そしてお茶が並べられたダスタルホン（食事をする際に敷かれる布；*dasturxon*）を囲み、しばらくおしゃべりをしながら皆糸紡ぎをする。オイサートもおもてなしのダスタルホンのセットが終わると、自分の紡ぎかけの毛玉のついた紡ぎ棒をもってきて、アダシ一行と一緒に紡いだ。しばらくするとアノラも帰ってきて、彼女もまた輪に加わり糸を紡ぎだす。アダシとマロハットの二人組に筆者とチンニが加わり、さらにオイサートとアノラも一緒に紡いだ。

冬場、筆者は何人もの女性から、「紡ぎ棒をもっているのなら、私の家に来てください。糸紡ぎをしながら座りましょう（おしゃべりしましょう）」と声をかけられたものである。紡ぎ棒と原毛があれば、糸紡ぎは、いつでもどこでもできる。手織り物生産は織りの作業よりも、糸を準備する時間の方が圧倒的に長い。「3日か4日あれば手織り物は織れますよ。糸紡ぎが大変なんです」とバザールで手織り物を売っていた人は言った。筆者の滞在先では夕食後、ランプのあかりのもとサルタナトとお手伝いのアジザやグルバホール、ときに娘のディノラや筆者はおしゃべりをしながら糸紡ぎをしていた。地道な糸紡ぎの作業は、いつでもどこでもできるその手軽さと、単調な作業の気をまぎらわすおしゃべりに支えられているのだろう。述べてきたように、調査地の女性にとって糸紡ぎは特別な訓練を経ることなく自然と身に付く技術のようである。さらに、アダシとマロハットの訪問から、糸紡ぎは移動しながらできる作業であることもわかる。隣接する2、3世帯を除けば、基本的に女性は他の世帯に用事もなく訪れることはしない。アダシもマロハットも、シャリフ氏宅にやってくる際は基本的に夫と連れ立ってであった。こう考えると、糸紡ぎは女性たちにとって他の世帯に訪問するよい口実になっているのかもしれない。

紡がれた糸は、大きな鍋で1度煮沸され埃や獣油などの汚れが落とされる。汚れが落とさ

18) シャリフ氏の妻。アダシの姑、マロハットの母親。

19) シャリフ氏の弟で、隣人。

れたあとは、染色をする。染料はバザールで売られている化学染料を用いる。筆者は、調査地では天然染料を使って染色をしているという話は聞いたことはなかった。染色の手順は次のとおり。染料を溶かした大きな鍋に洗浄された糸の束をつける。数分煮込むと糸に色がつく。色が染み込んだ後に鍋から引き出され、乾燥を経て毛糸は完成する。

4.2 無償労働としての手織り物生産

手織り物の技法、用途は多岐にわたる。主に敷物として生産・利用されるのはカッティク (*qattiq*)、テルマ (*terma*)、コクマ (*qoqma*)、ジュルフルス (*julxurs*)、ガジャリ (*gajari*) であり、総称してギラム (*gilam*) といわれる。²⁰⁾ その他の用途に生産されるのは、フルジュン (*xurjun*; ロバ・馬用の荷袋)、ブグジャマ (*bug`jama*; 儀礼用手織り物) である。²¹⁾ バザールで高値で売買されるギラムはカッティクで、その理由是用いられる糸の量が多いことと耐久性にある。ガジャリは織りの技法の難しさから高値が付く。続いてテルマ、コクマと値段が下がる。コクマには模様がなく織りの難度が低いために安値で売買される。生産される種類に関しては、筆者の知る限りでは結婚適齢期を迎える娘や息子がいる世帯ではカッティクが結婚式の持参財用を選択され、それ以外の世帯ではコクマやテルマが家に敷くために選択されていることが多かった。²²⁾

手織り物生産では、ウズベキスタン各地でみられるハシャル (*hashar*) といわれる無償労働が行なわれることもある。ハシャルをする人のことはハシャルチ (*hasharchi*) と呼ばれる。『ウズベク語詳細辞典 (O`zbek tilining izohli lug`ati Ikki Tomli)』のハシャルの項目には、「何かの仕事を一緒になって実行するためにコミュニティの側から提供された無償援助」と説明されている [Marufov 1981: 691]。「何かの仕事」とは先行研究では、家の建築やチャイハナといわれる喫茶場、用水路の管理などを指すと述べられている [樋渡 2008: 136]。調査地では、手織り物生産にかかる労働力の融通もハシャルと呼ばれる。調査地では手織り物生産にはハシャルチが絶対に必要というわけではなかった。世帯内の労働力だけで織りの作業が進められることもあるようだった。もちろん、手織り物生産以外でもハシャルと呼ばれる無償労働は存在する。調査地で手織り物生産以外にハシャルと呼ばれていたのは、男性の場合は家の建築に関する諸作業 (土台作り、レンガ造り、建築作業、屋根貼りなど) で、女性の場合ならば手織り物生産や結婚式の前行なわれる布団の綿詰め作業であった。なお、儀礼の手伝いはハシャルではなく、「儀礼のための奉仕 (*to`yga xizmat*)」または「手伝い (*yordam*)」といわれる。ハシャルを頼む人は、ハシャルチたちに報酬として現金を支払う必要はないが、作業中のお茶の

20) 標準ウズベク語では、ギラム (*gilam*) は毛羽 (パイル) のある手織り物を指し、パラス (*palos*) が毛羽のない手織り物を指す。調査地では、毛羽のない手織り物もギラムと呼ばれており、地域差があることが確認された。

21) これら手織り物の生産の際に用いられる織機、技法はそれぞれ異なる。場所によって生産される種類にも違いがある。手織り物の種類や生産技法の詳細に関しては別稿に譲る。

22) 持参財としての手織り物の位置づけに関しては別稿に譲る。

提供や食事を振舞う義務が生じる。ところが、近年では食事を振舞うのも相当な出費となるために、家の建築に関しては、プロの職人を呼ぶことも増えているようだ。また、融通した労働力の返礼は期待され、ハシャルチとして労働をした人物が逆にハシャルを要請することもある。その場合、以前その人にハシャルを要請した人は、基本的に要請に応えなくてはならないが、絶対ではないようだった。ハシャルチとして駆り出されるのは、親族や近所の人、同級生で日頃から関係の深い人々のようである。

たとえば、表1は2011年の3月から4月に手織り物生産をしていた8世帯を訪ね、誰が手織り物生産に携わっているかをまとめたものである。手織り物を生産する世帯において、その世帯の年長の女性が手織り物の所有者 (*gilamning egasi*) と呼ばれていた。²³⁾ 所有者の娘や嫁は、当然のごとく織りの作業を手伝う。表1において、ハシャルチと呼ばれていたのは姻戚関係にある人であった。ハシャルチは手織り物生産が行なわれている世帯に出向き、所有者とともに手織り物を織ることが期待される。しかし、必ず手織り物の織り出しから完成まで毎日行かずとも良いということであった。その後、ハシャルチが手織り物の所有者となり生産をする際には、以前の所有者はハシャルチとなって手伝いに行くのが望ましいとされている。実際に、表1の⑤の所有者は⑧の所有者と姻戚関係にあたり、²⁴⁾ まず、⑤に⑧がハシャルチとなって手伝いに行った数日後、今度は⑧が手織り物を織りはじめたので、⑧の元で⑤がハシャルチになり織りの作業をしており、労働力を融通し合っていることがわかる。ハシャルチは朝から一日手織り物を織り続けなければならないというわけでもなく、「もし明日ハシャルチが来れば、手織り物を切ってしまう(手織り物が完成する)だろう (*Agar ertaga hasharchi kelsa, gilam kesib qoladi.*)」という言葉に表れているように、自分の都合のつくときに突然やってくる不確かな労働力のようだった。

このようなゆるやかな労働交換の背景には、家の建築や結婚儀礼にかかる手織り物生産や布団作りは各世帯において毎年行なわれるものではないという事情がある。よって、労働力の返礼は早急に求められているものではないといえよう。また、親戚、近所の人、同級生は、調査地における密な人間関係の代表格である。ハシャル以外でも、結婚や割礼などの各種行事への手伝いや参加、とりわけ隣人とは調理器具の貸し借りなど日常的な交流など日頃のやりとりを通じて関係を構築している。こうした親密な関係性を基盤にして生じるのがハシャルである。

4.3 ハシャルチの働きとその役割

ハシャルチとなったジャミラ(50代前半、主婦)に同行する機会を得たときのことをフィールドノートをもとに記述する。ジャミラは、筆者の滞在先の前を通るアスファルト道路をはさんだ向かい側に住んでいる。三男を半年前に結婚させ、現在は夫と三男夫婦と同居する。夫は

23) 手織り物生産に関らない高齢の女性は除く。

24) ⑤の三男の嫁が⑧の長女である。

表1 誰と手織り物を織っているか

手織り物番号	種類	織り手 ★印：手織り物主	織り手と所有者との関係				
			娘（同居）	娘（婚出）	嫁	義姉／妹	その他姻族
①	カッティク	★ Anora					
		Yulduz	●				
		Mehliniso	●				
		Veja				●	
②	テルマ	★ Xuqun					
		Sabohat			●		
③	カッティク	★ Sarofat					
		Fazilat		●			
		O'g'ilo'y	●				
④	カッティク	★ Urus					
		Rohat	●				
		Sevara	●				
		Nazokat					●
⑤	コクマ	★ Jamila					
		Mohichehra			●		
		Oysat					●
⑥	テルマ	★ Nazokat					
		Adlat	●				
⑦	テルマ	★ Gulchehra					
⑧	カッティク	★ Oysat					
		Nazokat			●		
		Urus					●
		Jamila					●

日雇い労働者として働き、3人の息子は家畜ビジネスを営んでいる。

事例2：ハシャルチとしての手織り物生産（2011年4月26日）

ナゾキヤット（30代後半、手織り物）のところでテルマを織っていると聞いた筆者は、彼女の家に向かっていった。途中でジャミラに出会う。筆者を見るやいなや、ジャミラは「オイスート（40代後半、バザール商人）のところへハシャルに行こう」と強引に筆者を誘ってきた。後で知ったのだが、昨年の秋にオイスート商人の長女がジャミラの三男に嫁いでいて、ふたりは姻戚関係にあった。オイスートの家に着いた。しかし家には誰もいないようだった。「悪い犬」がジャミラと筆者の来訪に気づき、威嚇をしてきたので、とりあえず生産中の手織り物がある部屋に飛び込む。家には人の気配はなかったが、ジャミラは「絨毯を織りましょう」と提案。そして「手織り物があるのに所有者はどこへ行ったのやら」とブツブツ言いながら手織り物を織りはじめた。

しばらく織っていると、オイスートの嫁、ナゾキヤット（20代前半）がやってきた。ど

うやらウルス（50代前半、マクタブ掃除婦）のところで手織り物を織っていて、そこにハシャルに行っていたようだ。ジャミラはホッとしたりしく「もう！何度呼んでも誰も出てこないし、犬は来るし、フモトと一緒にどうしようかと思っていたんだから！」と笑いながら、面白おかしそに嫁に話した。ナゾキヤットは働くジャミラと筆者にお茶を入れてくれた。

さらにしばらく織っていると、セヴァラの母親ウルスがハシャルチとなってやってきた。ジャミラとウルスは同級生（1957年生まれで同い年）らしく、筆者にどちらが年上にみえるかと無理やり答えさせたのを皮切りに、仲がよさそうにおしゃべりに花を咲かせ、手織り物を織り出した。ジャミラとナゾキヤットの間に会話が少なかったのと対照的であった。

12時も大分過ぎると、ナゾキヤットが作ったスープとチャロップ (*chalop*)²⁵⁾ が出された。昼食である。どこからともなくやってきたオイサートの夫と次男、ジャミラ、ウルス、嫁、筆者で昼食を食べた。昼食の後は、少しおしゃべりをして、その後各々仕事に戻っていった。

筆者は、織りの作業で使われる、緯糸を小分けにしたラチャックを織り手たちのために準備をする。その横で、ジャミラ、ウルス、ナゾキヤットは手織り物を織り続けていた。もちろん、おしゃべりをしながらである。タシュケント州で食肉加工業を営むジャミラの次男が、同業者の長男一家が住む近くに、土地を買い移住しようとしている。はじめは、土地と家の基礎つきで1,000ドルと聞いていたのが、新たな情報では2,000ドルになっており、それは高すぎはしないか、というようなことを手織り物を織りながら話しているのだった。15時前、ジャミラは織るのに飽きたらしく、織機の上でゴロリとしはじめた。すると、お待ちかねのオイサートが帰ってきた。タイミングが悪い。車の音を聞くと、ジャミラは慌てて起きて「寝ていたっていうより織っていたっていう方がいいでしょう」と織りの作業を再開。

オイサートは帰ってきてみなに挨拶をした後、ナゾキヤットが用意したチャロップを飲んだ。今日は夜明けからウルグット²⁶⁾ のバザールへ布地の買付に行ったのだが、ウルグットのバザールが移転中で、それは彼女は思いもしなかったことだったのでとても驚いたこと、さらに布地バザールの場所もわからず、結局今日はほとんどバザールで買付ができなかったことをまずはハシャルチたちに話す。その後、オイサートは腰が痛いというジャミラにかわって織りに参加しだした。オイサートは何度も何度も「織りの作業が進まなくて恥ずかしい、恥ずかしい、このあと10日も15日もこのままなのかしら」と言っていた。ジャミラやウルスはオイサートがこう言うたびに「まだ織りはじめてから1週間も過ぎていないし、もしハシャルチが来れば明日には切る²⁷⁾ ことができるでしょう」と励ます。ジャミラ

25) ヨーグルトの水分を搾ったものに水と塩を加えた飲み物。夏によく飲む。

26) サマルカンド州南部ウルグット地区 (*Urgut tumani*) にある大規模なバザール。調査地域周辺で小売を営む人々が一般的に買付をするバザール。

27) 「*kesmoq*; 切る」は経糸を切り手織り物を織機から外すこと。「手織り物が完成する」の意。

はしばらく休憩をしたあと、抜けた嫁にかわってまた織りを再開。18時ころまで作業は続く。作業の後は一日の締めにお茶を、ということになり、涼しいという大きな家に皆で移動して、パンとあんずジャム、くるみ、干しぶどうなどを食べた。オイサートは「おかずを出さなければいけないのに」と何度もつぶやいていたが、とにかく皆で軽食を食べて、その後は解散となり、家の方向が同じジャミラと筆者は家路についた。

このやりとりからハシャルチは手織り物を織り進めるにあたって、労働力として有効であるといえる。ジャミラとウルスは、手織り物から離れて休憩することはあったものの、おしなべて織りの作業を続けていた。手を動かしながらハシャルチたちはさまざまな内容のおしゃべりをしていった。さらに、ジャミラの休憩中オイサートが帰ってきたときには、ジャミラは慌てて起きて、作業を再開している。このことから、ハシャルチとしてやってきた以上は仕事を遂行する義務が存在していることがうかがえよう。

4.4 織り進めるために必要なこと

4.4.1 織り進まないことへの圧力

2人のハシャルチを迎えたオイサートとナゾキヤットは、何度も手織り物生産が進んでいない、恥ずかしいと言っていた。たしかに、この世帯で手織り物を生産できるのはオイサートと嫁の2人だけである。嫁には1歳に満たない息子がいるので、目を離して織りの作業をするのはなかなか難しい。そうなるとやはり手織り物生産の進捗は主のオイサートにかかってくる。しかし、彼女はバザールでの商売とその買付の仕事があり、子育てに忙しい嫁の家内労働のサポートもしなければならぬ。カットイク1枚は3人で一日中織って3、4日かかる仕事である。オイサートだけでは、なかなか織り進められないということだ。ジャミラは帰り道、オイサートのところには嫁のモフチェフラが先日行ったし、自分も今日行ったのだから、ハシャルチには行かないと言っていた。述べたように、手織り物の完成までハシャルチは通いつめる義務はない。そのために、オイサートは来るかわからないハシャルチの労働力に過度の期待はできないということだ。オイサートの手織り物生産が進まないことへの恥ずかしさやその言い訳は、他の場所でも聞かれる決まり文句でもあった。「あとどれくらいで手織り物は完成しますか？」という筆者の質問に対して、自分にはしなければいけない家の仕事がたくさんあること、一日中手織り物を織っていられることができればそれほど時間はかからないが、仕事があるのでそういうわけにはいかない、という答えが決まって返ってくる。

女性にとっての家内労働の重要性や彼女たちの発言から、手織り物生産は手が空いたときに行なわれる合間の仕事であるといえる。とはいえ不思議なのは、合間の仕事であれば織り手たちは手織り物生産が進まないことに対して恥ずかしさを表したり、言い訳をしないのが自然に思われるのに、織り手たちは恥ずかしさを示したり言い訳をしたりする点であった。この疑問

に対しては次の見方を提示できる。手織り物は必要となればバザールで売ることができるなど、多少の経済的価値がある。さらに、現在でも結婚の際には持参財として必要とされているし、部屋に敷く生活用品としても使用される。調査地域の生活において、手織り物は生活必需品なので、その生産活動は完全に趣味的な活動とはいえない。生産に関して何かしらの規範が存在していると思われる。その規範は、誰が手織り物を生産しているかについて情報がある程度共有されているという点である。具体的には、誰が手織り物を織っていて、それはその後何日で完成したかについての情報の共有である。手織り物は一度整経するとできるだけ早く織ってしまうのが良いとされていた。述べたように手織り物生産は、世帯構成員に織りに専念できる者がいない場合は、いつ終わるかめどの立たない活動である。しかし、噂を通じて作業ぶりは周囲の人々の知るところであり、そこには生産者の状況に拘らず、手織り物は早く完成させるべきものという価値観が働いている。また、腕の評価に関しては、織りの「うまさ」ではなく「速さ」が基準となっていた。勿論それを生産者も意識しているからこそ、上記のような恥じらいや言い訳が現れるのではないだろうか。

4.4.2 協働の大切さ

ハシャルチの要請をせず、主にひとりで手織り物を織っていたサロハット（50代、主婦）を訪ね、一日にどれくらい織り進められるのかを聞いてみた。²⁸⁾ 彼女は「4日ほど前に織り出しました。家の仕事もあるし、ノディラ（三女）は手織り物へ行くし、²⁹⁾ ナルギザ（次女）はチロクチ市に行っているし、他の娘はマクタブがあるので、なかなか織れません。耕作地ではじゃがいもを植えたり、にんにくを植えたりするし、羊は息子や主人が世話をするけれど、牛は私たち（サロハットや娘たち）がみます。私は、大体朝のお祈りをしたあと、電気が来てから疲れるまで織ります。あとは、仕事の合間に、あなた（筆者）みたいな話し相手がいれば織れるけれど、ひとりだとすぐに嫌になってなかなか織れません。速く織ればあと3日もあれば織れるけれど、他の仕事ができなくなってしまう。（他の仕事もしていれば）あと10日でも15日でもかけることはできますよ」と話した。³⁰⁾ 彼女は、手織り物が進まない第一の理由を、彼女以外の労働力の不在と他の仕事に求めていた。この他興味深いのは、作業の進まなさを話し相手の不在にも求めている点である。手織り物生産はそれほど複雑な仕事ではないので、調査地では糸紡ぎと同じく女性であればこなせる仕事として認識されている。高度な技術は要求されないが、それは逆をいえば単調な作業ということになる。手織り物を順調に織り進めるためには、ハシャルチや客人などの作業場をともにする存在が重要だと考えられる。トル

28) 2011年4月2日インタビュー。

29) ノディラはシャリフ氏の手織り物工房で働いている。次節で詳述する。

30) サロハットには5人の娘がいるが、筆者が訪ねた際は、ひとり婚出、ひとはチロクチ市の親戚の家で裁縫技能の習得中、2人はシャリフ氏宅の工房で労働、ひとはマクタブ児童であった。時折婚出した娘が手伝いに来ることはあるが、作業は基本的にサロハットひとりで行なわれていた。

コの絨毯生産の村でフィールド調査を行なった田村〔2013〕は、絨毯生産は世帯間の厳密な労働交換のもと行なわれていることを明らかにしている。彼女は、労働交換によって世帯外の女性とともに作業をすることは、織り手たちにとって協働のよこびや作業の楽しさを喚起させるものであると論じている。Q 集落における手織り物生産では厳密な労働交換は行なわれていなかったが、織り手たちの発言から田村が指摘するように、ハシャルチもまた生産を楽しく効率よく行なうために重要な存在として認識されているのだろう。

糸紡ぎや手織り物生産は、調査地において農作業や家畜飼育のように食料や現金をもたらす直接生存に関する活動ではないし、婚姻や割礼儀礼準備のように大きな出費がかかるうえに、一家の名誉にも関する仕事でもない。また、独立以降、調査地では、機械織り絨毯の普及が徐々に進んでいる。人々は機械織りならではの均一で細かい織り目や真新しいデザインの新機械織り絨毯に憧れはもつものの、まだまだ敷物や持参財には手織り物が一般的である。この理由としては、牧畜が盛んな調査地域では手織り物の原材料となる原毛が、自家飼育羊からまかなえたり、バザールで安価で購入できることから、織りの手間さえ惜しまなければ、機械織り絨毯よりも安価で生産が可能な点がある。ソ連解体以降の生計維持の困難さを背景に考えると、放っておけば虫害に遭う羊毛の利用法であり家計の節約にもつながる手織り物生産は、現在、継続されている（行なわれない理由のない）生産活動である。

5. 賃金労働としての手織り物生産

本節では、1998 年から外国人向けに手織り物を販売しているシャリフ一家の手織り物生産について記述していく。Q 集落ではシャリフ一家を含む 3 世帯で観光客向けに手織り物を売っている。他の 2 世帯が手織り物を副収入源としているのに対して、シャリフ一家は手織り物販売を主収入源としていた。また、シャリフ一家の手織り物ビジネスは世帯内だけでは完結しておらず、敷地内に設けられた工房では織り手たちが日々生産に励む他、一家は集落の他の世帯で生産された手織り物を買収することもしている。³¹⁾ 彼らのビジネスは新しい手織り物生産のあり方をつくった。とりたてて観光するところがない Q 集落で外国人観光客を相手にビジネスを成功させている例は、シャリフ一家を除いて調査地域ではみられない。彼らのことは調査地域では「(観光) バスが停まる場所」として人々の間で広く知られている。

5.1 シャリフ一家の手織り物ビジネス

シャリフ一家の家の前には、チロクチ市を通りカシュカダリヤ州北部の中心地であるシャフ

31) 工房での生産だけでなく、19 世帯で織った手織り物や毛糸を交渉がまとまればシャリフ一家は買収することもしていた。また、工房生産を継続させるためには、一般的な世帯よりも多くの毛糸が必要となるが、糸紡ぎには時間がかかる。シャリフ一家では毛糸を入手するために、集落の希望者に原毛を紡ぐ報酬として、預けた原毛の半分は紡ぎ手のものとする「*tengma-teng*」という方法も取られていた。

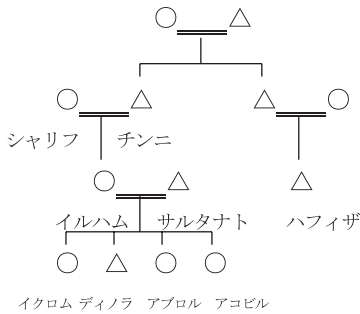
リサブズ市へ通じる舗装道路が走る。この舗装道路は、サマルカンドからシャフリサブズ（あるいはその逆）へ向かう観光バスの通り道でもある。春から初夏、秋の旅行シーズンには、観光客の休憩所としてシャリフ氏宅が利用される。一家は訪れた外国人観光客に手織り物を売る。シャリフ一家の家族構成は、シャリフ夫妻とその息子夫妻、息子夫妻の子ども4人の計8人である（表2参照）。彼らの収入源は、シャリフ夫妻の年金とマクタブで教師をする息子イルハムの月給、そして手織り物である。春と秋（4、5、10、11月）の繁忙期は手織り物の売上げを含め、2,000ドル程度の収入があるとのことであった。手織り物の材料費、人件費を差し引いてもこの額は集落では突出しており、シャリフ一家は裕福な世帯である。なお、筆者の滞在中は、シャリフ氏の妻、チンニの姪ハフィザ（1985年生）が住込みで月給をもらいながら家の仕事を手伝っていたり、夏季は農業や家畜の世話の手伝い要員として隣の集落から知合いの息子を住まわせていたりした。

彼らのはじめて手織り物を売ったのは1998年のことだった。当時は、シャリフ氏と妻チンニの年金が一家を支える主な収入源だった。結婚を控えた娘が4人同居していて、結婚費用の捻出もシャリフ氏にとっては頭の痛い問題だったという。当時嫁入りして間もないサルタナトによれば「私たちは貧乏だった。とても苦勞した。毎日肉なし³²⁾のピョヴァ（簡単なスープ）と大麦入りのノン（パン）を食べていたの」という生活ぶりだったらしい。経済的に苦しい生活は、手織り物を売ることによって少しずつ上向いていった。シャリフ氏が語るによれば、ある日、マロハット（四女、1978年生）が自分の結婚式を控え、カッティクを庭で織っていた。そこへ観光バスが通りがかった。バスに乗っていた観光客が、カッティクを織る姿に興味をもち、バスを停めた。カッティクを売って欲しいという観光客に、マロハットは首を縦

表2 シャリフ一家の世帯員構成

名前	続柄	性別	生年	職業
Xudoyqulov Sharif	家長	男	1945	年金受給者
Xudoyqulova Chinni	妻	女	1948	年金受給者
Xudoyqulov Ilhom	息子	男	1974	マクタブ教師
Qo'ldosheva Saltanat	嫁	女	1980	gilam 職人
Sharipov Ikrom	孫	男	1998	マクタブ児童
Sharipova Dinora		女	2000	マクタブ児童
Sharipov Abror		男	2002	マクタブ児童
Sharipov Akobir		男	2004	就学前

32) 調査地では、食事に肉（牛、羊肉）を入れることができるかどうかや、毎週どれほどの肉を購入、消費しているかが、その世帯の経済力を示す指標となっていた。肉なしの食事は珍しくないようだった。なお、シャリフ一家では、調査当時（2010～2011年）は毎週4kgの牛肉をバザールで購入し、毎日の夕食は肉入り（g'ushtli）だった。



シャリフ一家の世帯構成

- 1) シャリフとチンニの間には11人(3男 8女)の子どもがいる。現在は三男のイルハムと同居。
- 2) ハフィザはチンニの妹の長女。

図3 シャリフ一家の関係図

に振らなかったが、シャリフ氏の一声で売ることになった。カッティクを1枚売ったお金で、バザールでカッティク1枚と靴を1足マロハットのために買ったという。その年に売れたのは1枚だけだったが、その流れが途絶えることはなかった。翌年にも1枚手織り物が売れ、末息子イルハムの学費捻出に一役買ったという。シャリフ氏は「イルハムの学費のために牛でも売ろうかと言っていたんですが、手織り物を1枚売ったら、イルハムの学費はもちろんのことタシュケント土産までついてきましたよ」と言った。その後、持ち運びしやすい小さな手織り物を作ったほうがいい、という観光客を連れてくるガイドのアドバイスなどを取り入れ、少しずつ商売を拡大させていったという。彼らのビジネスが成功したのはウズベキスタン独立後に外国人観光客がある程度自由に旅行ができるようになったこと、個人で商売をすることが可能になった事情が背景にある。

今では、旅行シーズンとなる春には1日に3、4台の観光バスが停まり、旅行者が休憩がてら手織り物とシャリフ氏宅に併設された工房を見学し、気に入ったものがあれば買い物をしていく。聞けば、この12年の間に一家は商売にさまざまな工夫を凝らしてきたという。旅行者が持ち帰りやすい45×45 cmの小さなサイズの手織り物の生産や、染色をせずに天然色の毛糸を使った手織り物などの商品開発がそうである。45×45 cmサイズの手織り物は、シャリフ一家以外で売られているのを筆者は見たことがないし、天然の羊毛の色を生かした手織り物も調査地ではほとんど見られない。商品開発以外にも、観光客が来れば、工房での手織り物の生産や糸紡ぎのデモンストレーション、お茶やお菓子、パンの提供、パン焼きのデモンストレーションや、昼食のための場所提供なども行なっている。また、ガイドやバスの運転手には、今後も継続して訪ねてくれるように、現金や手織り物を渡したりする。「こういうこと(現金やプレゼントを渡す)をしなかったら、こんな場所に誰も来ない。私たちは努力をして豊かになったの」とサルタナトは現在の状況を語った。

手織り物ビジネスでの役割分担は次のようだった。シャリフ氏は訪れた観光客がどれほどの買い物をしたのか(しなかったのか)帳簿に記帳する。息子のイルハムは現金の管理とバザー

ルでの手織り物の買付をしていた。「何かを売って、それでパンを食べて、必要な物が買えればいいという人もいるが、それでは何の価値もない。それ以上の利益を得なければいけない」というイルハムの発言から、彼はより多くの利益を得ることに対して積極的だと感じられた。一方、サルタナトの役割は手織り物工房の世話、観光客との交渉、原毛などの材料の買付、毛糸の染色などである。サルタナトはウズベク語とロシア語の他に、数字や片言の売り文句ならば、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語、日本語の簡単な単語が話せる。彼女曰く、観光客とガイドのやり取りを見て少しずつ覚えたということであった。ガイドの通訳なしに、彼女が直接観光客と商売をすることもあった。ただし、交渉が成立し支払いの段になると代金のやりとりはイルハムがしており、サルタナトは手織り物ビジネスにかかる収益の管理にはほとんど関わっていなかった。サルタナトが収益管理に関らないのは、調査地では、家計の管理は男性が行なうのが一般的である事情が背景にあるからだと考えられる。³³⁾ ビジネスを持続、拡大させるために、シャリフ一家は工夫をこらし努力をしている。

5.2 手織り物工房での労働

家の敷地内の棟の一部屋は手織り物工房として利用されている（図 4 参照）。ここでは、時期によって顔ぶれや人数に違いはあるものの、2人～6人ほどの織り手が販売用の手織り物を生産している。織り手の親がイルハムなどに「織機は空いているか」と尋ねた際に、空きがあれば試しに織り手候補に織らせてみる。織り手候補が上手く織れるのだったら継続して来てもらうというのが、工房で働くに至る段取りであった。2010年の夏に働いていたのは、表3のようにマクタブ高学年から卒業後の20歳前後の未婚の娘たちだった。調査当時は、お手伝いのハフィザは、サルタナトの家の仕事を手伝うことが主で、工房で手織り物を織ることもあったが、他の織り手たちに比べると少なかった。彼女たちは織り上げた手織り物の枚数によって賃金を得る出来高制で働いている。たとえば、45×45 cmのサイズの手織り物1枚の報酬は2,000スム（2010年6月）であった。一日中真面目に作業をしていれば、1枚の手織り物が織れるという。

繁忙期の夏場であれば、彼女たちは朝の7時ころにはやってきて作業をはじめ、11時過ぎの昼食とその後の2時間ほどの昼寝をはさんでその後のお茶休憩から日が暮れる直前（20時ころ）まで作業をする。³⁴⁾ 工房では、織り手たちはラジオの音楽を聞いたり、おしゃべりに花を咲かせたりしているが、仕事をさぼることはあまりなく手を動かしている。休まず働くべきという考えは、織り手たちは「今日昼寝をするか」とお互いに休憩を取るかどうかを確認した

33) しかし、イルハムとサルタナトの間では、ビジネスに対する方向性の違いがあるようだった。イルハムが手織り物をできるだけ安く、そして多く売ることを指向する一方、サルタナトはできるだけ高い値段で織り手たちから手織り物を買取り、それに見合った値段で販売することが良い、と考えていた。

34) 労働時間は決まっていなかったが、観察の限りでは季節に関りなく日の出から2、3時間後（身支度と朝食、朝の仕事を済ませてから）から日の入り直前までのようであった。

表3 2010年夏期に働いていた織り手

織り手 番号	名前	生年	家内労働 従事者 ¹⁾	世帯 収入源	月給 ²⁾	日給 ³⁾	家畜 ⁴⁾	農業	年金	その他	その他内訳
1	Ilmira	1992	3名	3		●兄×2	●		●父	●姉, 兄嫁	仕立て
2	Gulbahor	1996	3名	5	●母	●父	●			●母親など	貴金属売り/ 商店経営
3	Saltanat	1992	1名	2		●父	●				
4	Sevara	1988	4名	3	●母, 兄		●		●父		
5	Nodira	1991	4名	2			●	●父, 兄			

- 1) 家内労働従事者としてカウントしたのは生年が1995年以前の女性。
- 2) マクタブ教師, マクタブ掃除人, 医療機関従事者など。この表ではすべてマクタブ掃除人。
- 3) 国内出稼ぎ, 職人, 建築関連の日払い労働。
- 4) 家畜飼育は世帯構成員の誰もが携わるので主な従事者は不明であった。

り手のセヴァラは、結婚式で着る衣装のことで頭がいっぱいになったようだった。早速サルタナトに衣装を買うために4万スム貰えないか、と相談をする。サルタナトから、明日のシャンバ・バザールの日にイルハムに頼んでみるように、と言われたセヴァラ。イルハムとの交渉の末、セヴァラが手にできたのは3万スムであった。サルタナトが筆者に説明してくれたところによれば、セヴァラはこれまで1万5,000スム分の手織り物を織っている。彼女は4万スムを申し出ているので、2万5,000スム分の前借りをしたいということだった。サルタナトは3万スムしか手にできず不機嫌になったセヴァラに事情を説明して納得させていた。織り手はイルハムやシャリフと会話をすることは報酬のことを除いてほとんどない。サルタナトは織り手とイルハムの橋渡的存在であるといえる。

サルタナトは織り手にとって近づきたい雇い主のイルハムに現金を貰う時に接触をする際の心強い存在でもあり織り手たちの働きぶりに目を光らせる監視人でもある。サルタナトの手元には、誰が何枚手織り物を生産したのかを記入したノートがある。「イルミラ, 9日で7枚! これは悪くない。ノディラ…19日で7枚…」とサルタナトは工房でノートを見て苦笑しながらつぶやいた。それを聞いたノディラもまた苦笑いをして作業をする。このように、織り手との距離を利用して彼女たちの仕事ぶりに苦言を呈すこともしばしばみられた。

5.3 手織り物職人サルタナトと織り手の位置づけ — 一家の誇りとしてのタシャップス参加から

シャリフ一家ではサルタナトだけが、「gilamdoʻz; 手織り物職人」としてウズベキスタンの手工芸組合 (*Hunarmand uyshmasi*) に登録されている。工房で働く織り手たちの中には見習いとして登録されている者もある。サルタナトと織り手は、一家の手織り物ビジネスにとってどのような存在なのだろうか。

筆者の滞在中、とりわけシャリフ一家を盛り上がらせていたのは「タシャップス (企業心; *tashabbus*)」であった。タシャップスは優秀な企業家、農場経営者、手工芸者をウズベキスタ

ン全土から選ぶコンテストである。地区大会、州大会で1位を獲得すると、タシュケントで行なわれる全国大会に出場できる。筆者も参加したチロクチ地区大会とカシュカダリヤ州大会では、審査員と出場者の他に、雑誌や新聞記者なども参加しており、会場は賑わいをみせていた。シャリフ一家は2010年にタシュケントで行なわれたタシャップスの全国大会の手工芸部門で3位を獲得しており、2011年のタシャップスもタシュケントに行くことを目標に、新しい手織り物の生産に熱が入っていた。

3月に行なわれるタシャップスのために、サルタナトは9月ごろにはすでにどのような作品を発表するかを考えていた。基本的な手織り物の技術をサルタナトは母親から学んでいるが、知らない技法で織られた手織り物も数多くあるという。彼女の未知の技法習得方法は、手織り物の現物や写真を観察し技法の見当をつけ、模様は方眼紙に落としてから試しに織ってみるというものであった。織りに関する基本的な素養があれば再現は可能だという。彼女は、2回目の参加となるタシャップスには、天然の羊毛の色を生かした手織り物ですべて統一させること、「娘の手織り物 (*qiz gilam*)」と呼ばれる彼女自身織ったことのない手織り物をメインにして参加すると、筆者に語った。彼女はタシュケントに行った際に、バザールのとある店の入口に敷かれていた「娘の手織り物」を見た。そこで興味をもったのが今回の挑戦のきっかけとなったらしい。サルタナトはそのとき撮った「娘の手織り物」の写真を観察して技法の見当をつけ、夕食後に懐中電灯の灯りを頼りに模様を方眼紙に落とし、織りの作業をはじめ、試行錯誤しながら少しずつ「娘の手織り物」を織り進めていった。しばらく織り進めると、この続きは工房で働く織り手のサンタに任せるといふ。「娘の手織り物」はサルタナトの指導のもと、サンタによって織られていった。ある日の夕食中、サルタナトは皆の前でサンタに「娘の手織り物」を織らせていることを話した。すると夫のイルハムは「今織らせなくても、冬に織らせればいいだろう？ (販売用の) カッティクを織らせなさい」と反論する。サルタナトは「今、見られる時に見ておきたい (指導できるときにしておきたい)、見られないときはカッティクを織らせるようにすればいいでしょう？」と言り返す。新しい手織り物創作への意欲やイルハムとのやりとりから、タシャップスに出品する作品選びにサルタナトは影響力をもっていることがわかる。

タシャップスへ誰が参加するかは、家長のシャリフ氏が決めるところとなった。選ばれたのは、イルハム、サルタナト、ディノラ、アジザ、グルバホール、シャヒスタと筆者であった。ディノラはサルタナトの娘で、アジザとシャヒスタはシャリフ氏の長男と次男の娘である。この2人は、ときとして工房で生産に励むこともあるが、他の織り手に比べれば不定期なものだった。グルバホールはシャリフ氏の兄の孫で、工房で働くだけでなくサルタナトの家の仕事の手伝いもしている。「娘の手織り物」を生産したサンタは参加できなかった。サンタだけでなく、工房で生産の主力となっている他の織り手の参加もなかった。生産には、シャリ

フ氏を中心とする親族以外の人々も関わっている。しかし今回の人選をみると、前節で指摘したように、彼女たちとシャリフ氏、イルハムの関係は賃金労働者と雇用主の関係でしかないようだ。サルタナトはあるとき筆者に次のように話した。「タシャップスに出るのにいろいろな手織り物を織って、お金も時間もとてもかかる。参加しなくてもいいのに、私たちは参加するんです。」こうした発言から、タシャップスなど展覧会への参加は利益重視ではない活動であり、手織り物ビジネスとは区別される活動であると考えられる。そして、織り手たちは手織り物生産のための労働力として位置づけられていることがわかる。

2011年のタシャップスでは、シャリフ一家は地区大会で1位を獲得し州大会に臨んだ。州大会では1位獲得はならず、「もっとも良い家族ビジネス賞」の獲得となった。タシャップス参加の取組を通じて明らかになったのは、シャリフ一家にとって手織り物生産はサルタナトを中心とする一家の活動であると位置づけられていることである。サルタナトを中心とした集落の娘たちの手織り物生産活動とは捉えられてはいない。サルタナトは対外的に一家の活動を代表する存在であり、織り手たちは一家の手織り物ビジネスを支える賃金労働者として位置づけられている。

5.4 サルタナトと織り手たち

5.4.1 サルタナトにとっての手織り物工房—ストレス発散の場

サルタナトは普段家の仕事を優先させていて、彼女自身が手織り物を織ることはほとんどない。サルタナトの仕事は、織り手たちへの昼食とお茶の提供、技術指導、織り手たちの給料の申し出の（ときには前借りの）イルハムへの口利きが主であった。織り手は作業中にわからないことが発生すれば、大きな声でサルタナトを呼び指導を乞う。サルタナトにとって、工房は織り手を指導し、働きぶりを監視する場所としてのみ位置づけられているのか。

敷地内では家の仕事をしながら動き回るサルタナトの姿が常にあった。ただ、彼女は仕事の合間や針仕事をするときは、工房にやってきて織り手とおしゃべりをしたり、作業をしたりしていた。筆者の知る限りでは、織り手以外でしばしば工房を訪れていたのは、サルタナトと彼女の子どもたち、姑、隣人のハイトギュル（50代前半）とノディラ（20代後半）であった。夫のイルハムはごくまれにやってくることはあったが、それは前者に比べれば少なく、大抵は作業の様子をうかがいに短時間滞在するだけだった。ときには、工房という場が彼女にとって家族生活におけるストレス発散の場としても位置づけられている様子が以下の出来事よりうかがえる。

事例3：サルタナトの愚痴（2011年1月21日）

どうやら、サルタナトと姑チンニの間にも確執はあるようだ。9時を過ぎたころ、工房にサルタナトがポットとパンをもって来て「ようやく、お茶をのんでいるの」と言って朝食を

とりだした。しばらくすると、サルタナトはチンニの悪口を言いだした。変な時間に、そして工房で朝食を食べていたのは、どうやらチンニの顔を見たくなかったかららしい。普段は、「おじいさんの家 (*buva uyi*)³⁶⁾」でシャリフ氏とチンニが座る前で朝食を済ませる。事の発端は昨日、シャリフ氏がパンを焼いたあとのまだ熱いタンディル (*tandir*; 土製の釜) に鉄の棒を置いてそれを取り出し忘れていたこと、³⁷⁾ 置きっぱなしの鉄の棒を発見したチンニは、それをサルタナトの仕業だと思い、彼女をきつく叱ったことだった。サルタナトは身に覚えはないのに文句を言われ、気分を害したらしい。このことがきっかけとなって、サルタナトはこれまで溜め込んできたらしい不満を噴出させだした。以前、婚出したチンニの三女が戻ってきたとき、三女はサルタナトに服を貸してほしい、と申し出た。そこでサルタナトが貸してあげたところ三女には大きく、サイズが合わなかった。このことを三女がチンニに話したところ、チンニが三女に向かって「あんたはサルタナトが食べているものを食べていないだねえ (サルタナトは嫁なのにいいものを食べて楽をしているという意味)」とサルタナトの前で発言したことについて、そういえばとても腹が立ったことなどを、工房で作業をする織り手たちにトツツと語っていた。途中で涙をこぼすサルタナト。織り手たちは反論はしないが同情的な態度もとらずサルタナトの話聞きながらだまって作業をする。それでもかまわずに語り続けるサルタナト。「チンニは朝ものすごく早く起きて、それでずっとお茶を飲みながら話す (文句を言う) のよ…グルミラ、私たちも年を取ったらこんなふう嫌な感じになってしまうのかな (*bemaza bo`lib qolamizmi?*)」

サルタナトは以前「姑も舅もいい人。それに夫も殴らないからいい人だ」と婚家の人々について述べたことがあった。だから、取り立てて大きな不満はないのだと筆者は思っていた。しかし、ときとして事例のように不満が表面化することもあるのだ。このとき工房にいたのは、グルミラとアジザであった。グルミラは古株の織り手である。現在は家で仕立ての仕事もしている。当時は工房でいつも見かける顔ではなくなっていたが、時折やってきては手織り物を織っていた。25歳とサルタナトと年齢も近く古株の彼女に対して、サルタナトは心を許しているようだった。彼女たちは、サルタナトの肩をもつわけでもなく、かといって同情をみせないのでもなく、ひたすらサルタナトの愚痴を手織り物を織りながら聞いているようだった。以前、結婚式の衣装に関するイルハムの心無い一言に憤慨したサルタナトと遭遇したのも工房であった。工房には愚痴を聞いてくれる存在がある。そして、姑来訪の可能性はあるが、舅や

36) 調査地域では標準ウズベク語のように家 (*uy*) と部屋 (*xona*) を区別せず、両者を「uy」という一単語で表す。この場合は、シャリフ氏の棟で彼とチンニが寝起きをする部屋のことである。

37) パンを焼いたあとのタンディルの口に鉄の棒を置き靴下などを掛けておくと、余熱で乾くので、洗濯物が乾きにくい冬季には時折行なわれていた。

夫の来訪はほぼなく、ここでの愚痴が一家の公の問題として表面化する危険も避けられる。工房という場所とそこで働く織り手たちは、サルタナトにとって、生産活動が行なわれるだけの場所や労働力としてのみ存在しているのではない。

5.4.2 織り手たち

一方、織り手たちにとって、工房で働くことはどのような意味をもっているのだろうか。彼女たちは織機の前に座り、作業をしながらラジオを聞いたりおしゃべりに花を咲かせたりしながら、一日を過ごしていた。おしゃべりの内容は、どこの誰が結婚するらしいとか、携帯電話の電波の調子と充電のことで多くは占められていた。後に詳述するが、調査地では、携帯電話の電波が一定せず、数日にわたり圏外になる事もあったし、停電している時間が長かったために、携帯電話の充電のタイミングも彼女たちの頭を悩ませていた。未婚女性は用もなく家の外に出ることは望ましくはないと認識されている。友人とのおしゃべりを工房で働く理由として挙げた織り手はいなかったが、手織り物生産のために家の外に出て、同じ年頃の娘たちと一日中おしゃべりができるのは貴重な機会である。

① 現金収入源としての手織り物生産

述べたように、織り手たちにとって手織り物工房で働くことの目的は、第一に現金を得るためであった。Q集落では基本的に家計は家長が管理するもので、世帯の人々は現金が必要になった際には、その都度家長にうかがうのが一般的であるとされていた。彼女たちは手織り物を織って手に入れた現金は、自分のために使っていたり、家長の指示で他の出費に充てられたりしていた。セヴェアラは得た報酬で結婚式の衣装用の少し高い布地を買ったり、グルバホールは冬にマクタブに履いていくブーツが欲しいと言って生産に励んでいた。一方、ノディアは報酬でずっと携帯電話が欲しかった。しかし、そのお金は妹のマクタブ修了式の参加費に充てると父親に言われて、彼女の手には残らなかった。表3より、彼女たちの実家は他に収入源があることがわかる。彼女たちの世帯では、家畜や農産物、日雇い労働など複数の収入源をもち生計を維持している。しかし、家畜や農産物はバザールに行き交渉して現金化しなければならず手間がかかる。また日雇い労働も夏季は仕事があるが冬季は激減するので、収入源としては安定していない。ただし、ノディアはその後父親から携帯電話を買ってもらっていた。このように彼女たちが得る現金は家計の助けとなったり、欲しい物を買う際の資金となったりしている。

② 出会いの場としての工房

織り手たちのような未婚の娘は、娘らしさをめぐる規範のもとで日々を過ごしている。それは、具体的には用もなく家の外を出歩かない、親族や同級生以外の男性と歩かないなどである。また、婚前交渉は人々が最も神経を尖らせる、あってはならない問題であった。こうした処女性の重視は、調査地域だけでなくウズベク人社会全般にみられる。未婚の娘の処女喪失は

そのコミュニティからの排除を意味する [和崎 2007]。性規範からの逸脱は、娘の結婚を遠のさせるだけではなくその家族の名誉も傷つけることになるので、逸脱のないように注意が払われる。結婚に際して重要なのは、娘が歩いていないこと (*yurmog*; 歩く (性規範からの逸脱とも捉えられる行動をする)) と家族の評判であるとされていた。「*Qiz bora kattaroq bo'lgan sari kichikina bo'ladi*, 娘は成長すれば小さくなる」という言葉をサルタナトとハフィザは、調査だと言ってしきりに外出したがる筆者に教えてくれた。ハフィザはシャリフ一家で住込みお手伝いをはじめて5年になるというが、アスファルト道路を挟んだ向かいの丘の中腹にあるグリスタン (50代, 主婦, シャリフ氏の妹) の家には1度しか行ったことがない。ただし、彼女はQ集落の生まれではないので、他の世帯に知合いも少なく用事もないのは留意すべきである。とはいえ、ハフィザは基本的には家で一日中サルタナトの家の仕事を手伝うか、電話をしていた。用事があるときはバザールへ出かけ、それ以外は1ヵ月に1, 2度実家に帰る他は家の敷地を中心に活動していた。

少なくとも世帯に1匹は飼われている犬に対する警戒心も、人々が外出をためらう理由であった。筆者は世帯調査のために集落を歩き回っていたが、行く先々でしばしば「犬は怖くないのか」「犬は襲ってこないのか」と驚かれ、尋ねられた。世帯調査を開始した当初は、そもそも犬が恐ろしいものという認識がなかったため、人々の発言には首をかしげるだけだった。しかし、上の発言が続くと、不思議なもので犬に対する恐怖心が芽生えてきた。2, 3回犬に噛まれそうになる経験をすれば、恐怖心はすっかり心に根付いた。Q集落では多くの世帯で犬を飼っている。壁のない敷地に来訪者があると、容赦なく吠え、突進してくる犬もいる。「*Yetmish ketarmish it yoq qishloqqa ketarmish*, 70歳は行くらしい、犬のいない村へ行くらしい」とは、高齢者に対して囁かれる冗談である。「犬のいない村」とは、死後の世界のこたらしい。犬に対する恐怖心は人々の間で共有されていて、結婚や名誉問題に加えて娘が外出をためらう一因と考えられる。

家にいながらにして (性規範に抵触をせず)、親の社会的評判の影響も受けず、自らのネットワークを通じて結婚相手を見つけたハフィザを事例に、工房での労働とそれを通じて形成されたネットワークのもつ可能性を検討したい。以下の記述は、ハフィザが結婚に至るまでの過程をフィールドノートの記述をもとに筆者が再構成したものである。³⁸⁾

事例4：ハフィザの結婚

2011年6月28日、ホームステイ先の住込みお手伝いの娘ハフィザを訪ねてくる夫婦があった。2人は「ソウチ」で、ハフィザを息子の嫁にと、訪ねてきたらしい。ソウチとは花

38) 以下の事例の記述は、宗野ふもと、2012。「『電話彼氏』を婿にする—ウズベキスタンの結婚事情」『アジア・アフリカ地域研究』12(1): 133-136の文章を修正したものである [宗野 2012]。

婿候補側の人間で、花嫁候補の両親に会い結婚を申し込む役目の人である。今回のように両親である必要は特になくて、親戚や友だちがソウチとなることもある。調査地域を含むウズベキスタンでは、結婚話は恋愛結婚であれ見合い結婚であれ、ソウチが花嫁候補のもとを訪ねて結婚を申し込み、それを花嫁候補の両親が承諾してからでないと具体化しない。その日偶然訪ねてきていた親戚が、ハフィザにソウチが来たことを知ると、なんともいえないニヤニヤした表情を浮かべて、「一番いいことが起きたのね」と言った。

ハフィザは25歳。調査地域では20歳前後で多くの娘には結婚話がもち上がり、遅かれ早かれ嫁いでいく。25歳というと十分臺が立った年齢なので、なかなか花婿はみつきにくい。彼女曰く、父親が「あまり話が通じない」人物だったために、結婚話がなかなか具体化しなかったようだ。ハフィザは数年前に母親を亡くしており、さらに父親も述べたような人物であるために、親戚でもあるシャリフ氏がハフィザの父親にかわってソウチの申し入れを受けた。その日、彼女の少し遅めの結婚話の浮上に、終始周囲は喜びで沸いていた。

ハフィザには、会ったことのない彼氏 (yigit; 若い男性, 転じて彼氏の意) がいた。毎晩遅くまで誰かと電話で話していたし、ソウチが来る少し前に、筆者はハフィザから彼氏と喧嘩をして彼が電話に出てくれなくなったことの相談をうけたこともあった。しかし驚いたのは、実は今回のソウチは先日ケンカをした彼氏の両親ではなく、その彼の友だちの両親だったことである。ハフィザには少なくとも彼氏が2人いたということになる。さらに2人の彼氏はお互い友だちで、ともにタシュケントで出稼ぎ中、カシュカダリヤ州出身であった。今回の一方の彼氏によるハフィザへのソウチ派遣で、2人の仲は気まづくなつたらしい。その後、彼氏たちの仲が修復されたのかどうかはわからない。こうしたトラブルがありつつも、ソウチが来てから半年後の2011年11月、彼女は幸せそうに、でも少し不安そうに「遠いけれど、(ガスや電気、水の)環境があるところ」へ無事に嫁いでいった。

ハフィザが彼氏たちと知り合ったのは、工房で働く織り手のグルミラがハフィザに彼らの携帯電話の番号を教えたのがきっかけだった。ウズベキスタンでは、近年急速に携帯電話は普及している。ハフィザだけではなく、織り手たちも携帯電話に皆夢中だった。彼女たちにとっての欲しいものは何を差し置いても携帯電話だったし、給料を貯めて念願の携帯電話をもてば、会ったこともない彼氏を必ずといっていいほどつくっておしゃべりを楽しむのだった。ノディラは、念願の携帯電話を手に入ると、早速織り手仲間のサンタから彼氏を紹介してもらい、彼とおしゃべりを日々楽しんでた。「どのような人なのか、その男は」と筆者が尋ねると、「隣り村に住んでいて、とても頭のいい人」と答えた。のろける彼女は、どこかでみたことがあるような女の子の顔で、ほほえましかった。

友だちから電話番号を手に入れるのが、電話を通じた彼氏あるいは彼女の王道のみつけ方のようだった。この他に、若い男性は、バザールの携帯電話料金の支払い所で番号を大量に

入手して若い娘が出るまでひたすら電話をかけ続ける方法をとることもある。若者に限らず、ウズベキスタンの人々は自分の携帯電話の番号を見ず知らずの人間に教えることや、自分の番号が勝手に誰かに知られることについてほとんど抵抗がない。むしろ、「何かあった時のために」といって、多くの人の番号を手に入れて何かの時のために備えることに余念がない。こうした事情が背景にあって、出会いを求めて電話をかけ続ける行動も許容されているようだ。料金支払い所には、入金先の携帯電話の番号が記入されたノートがある。番号の入手方法に関しては不明だが、彼らはここから大量に携帯番号を手に入れている。娘が電話に出れば、あとは会話をがんばってその娘と電話の付き合いを続けるのもいいし、娘の友だちを紹介してもらってもいい。芋づる式に出会いは広がっていくのである。

携帯電話を使って見ず知らずの異性と知り合い、何人もの彼氏とおしゃべりを楽しんでいる娘たちだけれど、述べたように、彼女たちは娘らしさをめぐるさまざまな性規範のもとで日々を生きている。結婚適齢期を迎えた娘たちにとって、そして彼女らの両親にとって、婚期を逃してしまうことへの恐れは強い。だから彼女たちがどこの誰かもわからない彼氏と会うことはハフィザのように結婚話が具体化しない限り、ない。

携帯電話を通じて知り合い結婚に至った話は、調査中に噂でちらほら聞いていたものの、一般的ではないし、現在では親がみつけてきた相手との結婚がやはり一番多い。彼氏との結婚の望みは薄いけれど、それでも娘たちは彼らとのおしゃべりをやめない。見ず知らずの若い男から電話がかかってくると、適当に嘘をつきながらも、楽しそうに笑っておしゃべりを続ける娘たち。ときには隣にいる筆者のことを話題に上げて、話をしると携帯電話を私に突き出してくることもあった。私は何を話せばいいかわからないし、話すこともないので無言で娘に電話を突き返すと、とても不思議そうな顔をして「何で何も話さないの？」と彼女たちは言う。会ったこともない彼氏とおしゃべりすることに抵抗がない彼女たちなのである。

嫁いでいったハフィザの携帯電話にある日電話をかけてみた。彼女の嫁ぎ先の近くまで行くことがあったから久しぶりに会いたくなかったのだ。しかし、何度かけても電話は通じなかった。後日シャリフ一家を訪ねてきたハフィザは言った「今は私には携帯電話は必要ない。義理の父の電話があればいいでしょう。だからお義父さんの方に電話してみて、フモト姉さん。絶対に遊びに来て。私たちは、いつでも待っているから」。ハフィザが娘から花嫁に、そして妻になったことを知った瞬間だった。

ハフィザが、夫となる男性、ザファールとはじめて顔合わせをした日、隣人でシャリフ氏の弟のアザムは、「いままでの結婚はアンティークになった」と少し興奮気味に言った。電話を通じた出会いは、これまであまりなかったケースだった。さらに、ソウチと花嫁候補（ハフィ

ザ) が同席し話をすることや、花婿が花嫁の家³⁹⁾を公に訪ねることは、サルタナト曰く「まったくなかった」ことだった。また、ハフィザの方がザファールより2歳年上であった。ウズベキスタンでは花婿が花嫁より年上なのが一般的な夫婦の形態である。この問題については、両家の間でハフィザの生年をザファールと同じということにすることで解決させた。このように、ハフィザの事例は、調査地の一般的な結婚のあり方とは一線を画すものだったといえる。興味深かったのは、周囲の人々が「まったくなかった」結婚話を、すんなりと受け入れ(たよりに思えた)、ハフィザを祝福したことであった。ハフィザの結婚が具体化したのはなぜだろうか。その理由として、第一にハフィザが「結婚しづらい」境遇にあったことである。結婚の同意やその後の話し合いは、花嫁花婿の両親、とりわけ父親が中心となって進められる。父親が亡くなっていたり、ハフィザのように父親に問題がある場合は、花婿候補側としても結婚話を進めづらくなる。ハフィザは以前、婚約式の前の破談や、父親が彼女に無断で了承したことから、ある男性の3度目の結婚の相手として迎え入れられそうになるという、苦い経験をしていた。ハフィザが他の娘と比べて結婚相手を見つけにくかったことは、周囲も認識していることであった。だから、多少一般的でなくても今回の結婚が成立したのではないか。「女性は独立しては生きていけない、だから結婚しなければならない」という結婚を義務として捉える考え方が、逆説的に、変則的な結婚のあり方を許容することにつながったのではないか。第二に、そもそもザファールと知り合うことになったのは、織り手仲間のグルミラのおかげだった。工房で働けば自分の携帯電話をもつこともできるし、工房での友人関係を利用して、結婚相手の候補と知り合うことができる。ハフィザの結婚は、工房の友人関係があっこそ実現されたのである。

6. 考察と結論

前節までに調査地における手織り物生産は誰によってどのように行なわれているのかを明らかにしてきた。これまでの内容をまとめると以下ようになる。

第4節では、主として調査地域における一般的な手織り物生産を描いた。手織り物に不可欠な材料の糸は女性たちが空いた時間に紡いでいる。糸紡ぎは紡ぎ棒と原毛があればどこでも出来る作業なので、女性たちは糸紡ぎをしながら他の世帯を訪ねてそこで他の女性と交流することができる。手織り物生産に関しては、世帯外からの労働力も駆り出されることがある。また、手織り物の完成に要した日数に関して世帯外でも情報の共有がされている。世帯外の労働力の参加は、手織り物生産の現場を活気づかせており、情報の共有は手織り物のより早い完成をうながすプレッシャーとなっている。女性たちにとって、第一に求められる仕事は家の仕事

39) ハフィザの結婚話はシャリフ氏の合意によって具体化したので、婚約式まではシャリフ氏宅で行なった。

であり、手織り物生産は合い間に行なわれる仕事であった。興味深いのは、優先順位が低いからといって、自由に作業を進めてもいいというわけでもなく、「できるだけ早く完成させなければならない」という思考が働いている点である。そこには、働きの女性の女性を良いとする価値観や、手織り物生産の情報が世帯外にも共有される状況が関わっていると考えられる。手織り物生産は、世帯外とのつながりの中でこそ遂行される仕事である。

第5節では、シャリフ一家の手織り物ビジネスと工房における生産の様子を描いた。工房で働く織り手は賃金労働者であり、より多くの手織り物を織ることを求められている。シャリフ一家の手織り物ビジネスを影で支える織り手たちだが、生産の場である工房で彼女たちは、できるだけ多くの手織り物を生産しなければいけない圧力はあるが、絶え間無いおしゃべりの中作業をしている。仕事とはいえ家の外に出て、同年代の娘たちと一日中おしゃべりできる機会は、家で家内労働の手伝いをしているだけではめったにない。一方、サルタナトの立場は雇い主であり、織り手たちの働きぶりを監視もするが、彼女にとって織り手たちはおしゃべり相手であり、工房はときとして彼女の家庭生活での不満のはけ口ともなっていた。またハフィザの事例から、娘たちが工房での友人関係を通じて、結婚という娘たちにとって直近の大きなイベントに対して主体的に関わっていたりすることが明らかとなった。

手織り物生産の現場に着目することで女性の生活のどのような側面が描けたらうか。先行研究では市場経済への移行と伝統的な男女観の再評価は、女性が不安定な労働に従事しなければならない状況をもたらしたと指摘されてきた。また、ソ連時代の社会保障が維持されなくなったことは、家族と親族のセイフティネットとしての重要性を高めた。女性にとって、結婚と家庭生活の維持はセイフティネット確保の意味をもつようになった。サハデオとザンカは、ソ連解体以後の社会経済の変化の中で、「女性は社会生活、結婚相手の候補、出産、家事労働、そして誰とどのように結婚すべきかに関してさえ、新しい制約と要求に直面している」[Sahadeo and Zanca 2007: 86-87]と述べる。手織り物生産の現場に目を向けてみると、女性たちが家の仕事から逃れておしゃべりをしながら作業に励んでいたり、愚痴をこぼしていたり、結婚相手との出会いにつながる友人関係が作られていたり、「新しい制約と要求」への対処がなされていた。

トルコの絨毯生産とグローバルな市場経済システムの関りを論じた田村は、調査地域における絨毯生産を「マイナー・サブシステム」[松井 1998]というべき活動であると述べている[田村 2013: 273]。「マイナー・サブシステム」とは、「集団にとって最重要とされている生業活動の影にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている副次的ですらないような経済的意味しか与えられていない生業活動」[松井 1998: 248]と定義されている。田村は、彼女の調査地域のメジャー・サブシステムはオリーブの商品栽培であること、絨毯生産の生計における位置づけはオリーブよりも低いが、絨毯生産は女性たちが世帯を超えて協力し

ながら行なっていることを明らかにしている。そして、絨毯生産の事例を通して、ともすれば苦痛を伴う行為である「労働」が、人々が集まりおしゃべりをする楽しさで紛らわされ、労働をともしる人たちの関係性の維持へとつながっていると論じている [田村 2013]。このような調査地域における絨毯生産を田村は「マイナーでありながら（むしろ、メジャーでないからこそ）、状況に応じて市場経済と自給経済を自在に往還する余地を残した生産活動である」 [田村 2013: 273] と位置づける。第4節で述べたように、手織り物はその経済的価値は家畜などに比して大きくないが、継続されている生産活動である。つまり、手織り物生産もまた「マイナー・サブシステム」であるといえる。生産性のみを追求しない「マイナー・サブシステム」としての手織り物生産の場では、市場経済への移行や伝統的男女観の再評価と女性という関連ではこぼれ落ちてきた女性の生活における、「新しい制約と要求」への対処が行なわれていた。

「女性は独立して生きていけない、だから結婚しなければいけない」とは、調査地域の女性の口からしばしば聞かれた言葉である。「独立して生きていけない」という言葉には、女性は結婚するまでは父親のもとで、結婚後は夫のもとで生きていく存在であることが含意されている。しかし、彼女たちの日常に入り込んでみれば、市場経済への移行や伝統的男女観の再評価の観点のみで、周縁化された存在として彼女たちを描くには無理が生じることがわかる。たしかに、既婚女性は家畜飼育などの経済活動を含む家内労働や育児に励み、また、家の敷地の外へ出る機会は、儀礼やハシヤル、夫を同伴した外出を除いて限られていた。未婚女性も、結婚をするためにはあまり外出をせず家の仕事に励むことが求められていた。しかし、こうした家内労働や外出の不自由がある一方で、手織り物生産のような息抜きのある活動も存在する。本稿で述べてきたのは、家内労働や、娘らしさ嫁らしさをめぐる規範に絡め取られつつも、そこから息抜きをできる場所を確保し、ときには自分の将来に積極的に関る女性たちの姿であった。

謝 辞

本稿のもとになった調査は、平成22年度京都大学教育振興研究財団長期派遣助成を受けて可能になりました。また、執筆に際しては指導教官の藤倉達郎教授、帯谷知可准教授から有益なコメントを多くいただきました。この場を借りて感謝を申し上げます。

引用文献

英語

- Akiner, S. 1997. Between Tradition and Modernity: The Dilemma Facing Contemporary Central Asian Women. In B. Mary ed., *Post-Soviet Women: From the Baltic to Central Asia*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 261-304.
- Azimova, N. 2001. Inside the Workings of an Uzbek Family, *Women of Central Asia* 9. Women's Resource Centre.

- Fathi, H. 2006. Gender, Islam, and Social Change in Uzbekistan, *Central Asian Survey* 25(3): 303-317.
- Kamp, M. 2005. Gender Ideals and Income Realities: Discourses about Labor and Gender in Uzbekistan, *Nationalities Papers* 33(3): 403-422.
- _____. 2006. *The New Woman in Uzbekistan: Islam, Modernity, and Unveiling under Communism*. Seattle: University of Washington Press.
- _____. 2009. Women's Studies and Gender Studies in Central Asia: Are We Talking to One Another, *Central Eurasian Studies Review* 8(1): 1-12.
- Kandiyoti, D. 1998. Rural Livelihoods and Social Networks in Uzbekistan: Perspectives from Andijan, *Central Asian Survey* 17(4): 561-578.
- _____. 2003. The Cry for Land: Agrarian Reform, Gender and Land Rights in Uzbekistan, *Journal of Agrarian Change* 3(1, 2): 225-256.
- _____. 2007. The Politics of Gender and the Soviet Paradox: Neither Colonized, Nor Modern? *Central Asian Survey* 26(4): 601-623.
- Kandiyoti, D. and N. Azimova. 2004. The Communal and The Sacred: Women's Worlds of Ritual in Uzbekistan, *Journal of the Royal Anthropological Institute* 10: 327-349.
- Koroteyava, V. and E. Makarova. 1998. Money and Social Connections in the Soviet and Post-Soviet Uzbek City, *Central Asian Survey* 17(4): 579-596.
- Megoran, N. 1999. Theorizing Gender, Ethnicity and the Nation-State in Central Asia, *Central Asian Survey* 18(1): 99-110.
- Northrop, D. 2004. *Veiled Empire: Gender and Power in Stalinist Central Asia*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Olcott, M. B. 1991. Women and Society in Central Asia. In W. Fierman ed., *Soviet Central Asia: The Failed Transformation*. Boulder: Westview Press, pp. 235-254.
- Peshkova, S. 2009. Muslim Women Leaders in the Ferghana Valley: Whose Leadership is it Anyway? *Journal of International Women's Studies* 11: 5-24.
- _____. 2013. A Post-Soviet Subject in Uzbekistan: Islam, Rights, Gender, and Other Desires, *Women's Studies* 42: 667-695.
- Sahadeo, J. and R. Zanca. 2007. Part 3 Gender: Introduction. In J. Sahadeo and R. Zanca eds., *Everyday Life in Central Asia: Past and Present*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, pp. 85-87.
- Tokhtakhodzhaeva, M. 1999. Traditional Stereotypes and Women's Problems in Post-Soviet Uzbekistan: A Survey of the Mass Media, *DOSSIER* 22: 1-8.
- _____. 2008. *The Re-Islamization of Society and the Position of Women in Post-Soviet Uzbekistan*. London: Global Oriental.

ロシア語

- Alimova, D. A. 1991. *Zhenskii Vopros v Srednei Azii*. Tashkent: 《FAN》 Akademii Nauk Respubliki Uzbekistan.

ウズベク語

- Azizxo`jaev va Boshqalarga xokazo. 2005. Chiroqchi tumani. In *O`zbekiston Milliy Ensiklopediyasi*, p. 623. Davlat ilmiy nashriyoti. 9-ch jild.

Marufov, Z. M. 1981. Hashar. In *O`zbek Tilining Izobli Lug`ati Ikki Tomli*. Moskva: Rus Tili Hashriyoti, p. 691.

日本語

今堀恵美. 2006. 「ポスト・ソヴィエト期におけるカシュタ（刺繍）生産と副業—ウズベキスタン・ブハラ州ショーフィルコーン地区の事例から」『日本中東学界年報』21(2): 113-146.

帯谷知可. 2003. 「最近のウズベキスタンにおける国史編纂をめぐる—『民族独立理念』のもとでの『ウズベク民族の国家史』『東欧・中央ユーラシアの近代とネイションI』(北海道大学スラブ研究センター研究報告シリーズNo. 89), 北海道大学スラブ研究センター, 35-48.

菊田 悠. 2003. 「一つの生活世界, 二つの信仰実践—ポスト社会主義圏におけるイスラームとジェンダー」佐々木史郎編『ポスト社会主義圏における民族・地域社会の構造変動に関する人類学的研究—民族誌記述と社会モデル構築のための方法的・比較論的考察』国立民族学博物館, 159-171.

宗野ふもと. 2012. 「『電話彼氏』を婿にする—ウズベキスタンの結婚事情」『アジア・アフリカ地域研究』12(1): 133-136.

田村うらら. 2013. 『トルコ絨毯が織りなす社会生活—グローバルに流通するモノをめぐる民族誌』世界思想社.

樋渡雅人. 2008. 『慣習経済と市場—開発—ウズベキスタンの共同体にみる機能と構造』東京大学出版会.

松井 健. 1998. 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体」篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店, 247-268.

和崎聖日. 2007. 「〈転落〉のセルフ・ストーリー—ウズベキスタンにおける女性『乞食』の事例から」『文化人類学研究』8: 72-92.

_____. 2012. 『ソ連解体以後のウズベキスタンにおける家族と相互扶助に関する人類学的研究』京都大学人間環境学研究所, 博士論文.